

かわ むこう 遺 跡

多陀寺川荒廃砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2000年 2月

島根県浜田土木建築事務所
島根県浜田市教育委員会



卷頭図版 1 国府地区遠景（北より）



卷頭図版 2 川向遺跡調査区全景（南西より）



卷頭圖版 3 木 偶



卷頭圖版 4 木 偶

序

浜田地方は他の地方に比べ公共施設の整備が大きく立ち遅れています。また、平地部は少なく急峻な地形で、集中豪雨や台風の襲来によって水害や土砂災害が発生しやすいところがあります。

島根県浜田土木建築事務所では、多陀寺川荒廃砂防事業で砂防ダム建設を平成9年度～平成11年度の計画として進めています。

この建設に際しては、埋蔵文化財の保護に十分留意し関係機関と協議しながら進めています。しかし、どうしても避けることのできない埋蔵文化財については、事業者の負担により必要な調査を実施し記録保存を行なっています。

本報告書は平成11年度に実施した川向遺跡の調査の結果を浜田市におかれましてとりまとめたものであります。本書が郷土の歴史に関する貴重な資料として、学術研究ならびに学校教育や生涯学習のためにも広く活用されることを期待するとともに、本事業が埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ、地域の防災施設整備の一環として進められていることへのご理解を頂きたいたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご尽力頂いた浜田市教育委員会並びに関係各位に対し、深堪なる謝意を表するものであります。

平成12年2月

島根県浜田土木建築事務所

所長 齋藤泰雄

序

浜田市教育委員会では多陀寺川荒廃砂防事業に伴い、平成11年度に川向遺跡の発掘調査を実施しました。

浜田市には石見国分寺跡、同国分尼寺跡を始め多くの遺跡が存在しています。所在地は確定していませんが石見国府も存在したと考えられており、古代から中世にかけての石見地域の中心地であります。当教育委員会では、これらの文化財の解明を行うためこれまで石見国分寺跡・下府廃寺跡・古市遺跡・横路遺跡の発掘調査を実施し、いずれも貴重な調査結果を得ております。

川向遺跡は以前より畠地から遺物が採取され、浜田高校などに保管されていました。調査の結果、弥生時代から鎌倉時代にかけての土器・木器が見つかりました。なかでも弥生時代の木偶は中国地方で初めての出土例となり、国府地区の歴史及び弥生時代の祭祀を考える上で重要な発見となりました。

本書はこれらの資料を末長く後世に伝え、学校教育や生涯学習などひろく活用するために報告書としてまとめたものであります。

本書の資料が幅広く活用されることにより、文化財保護思想の普及、歴史研究への一助となることを願っております。

おわりに、調査を指導していただいた浜田市文化財審議会会长の桑原韶一先生をはじめとする諸先生方、島根県教育委員会及び関係諸機関に厚く感謝申し上げます。また、あらゆる面から御協力下さいました地元の方々に対し、深甚なる謝意を表する次第であります。

平成12年2月

浜田市教育委員会

教育長 竹 中 弘 忠

例　　言

1. 本書は浜田市教育委員会が平成11年度に実施した多陀寺川荒廃砂防事業に伴う川向遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は次のような組織で行った。

調査主体	浜田市教育委員会教育長 竹中弘忠
調査指導	中村唯史（島根大学汽水域研究センター客員研究員）
	桑原韶一（島根県文化財保護指導員）
	島根県教育委員会 文化財課
調査員	柳原博英 (浜田市教育委員会 文化振興課 文化財係 主任主事)
事務局	浜田市教育委員会 文化振興課 文化財係
3. 調査にあたり協力および従事していただいた方々は次のとおりである。

調査協力	田中義昭、中村昭美、岩橋孝典・寺尾 令・巾川 寧・平石 充・間野大水 (島根県埋蔵文化財調査センター)、梅木茂雄(江津市教育委員会)、 宮崎泰史(大阪府立弥生文化博物館)、宮本徳昭、石田為成
調査参加	池田又次郎、小林正徳、勝田孝幸、佐々木一長、柴田亞希子、清水義二、 高原ひとみ、田淵義明、中田貴子、中田洋子、半場利定、村上美佐子、 山田ゆう子、吉田安男
4. 遺跡出土の木偶の放射性炭素年代測定は株式会社 地球科学研究所に委託し、分析結果の概要を掲載した。
5. 遺跡内の花粉分析・珪藻分析・樹種鑑定は川崎地質株式会社に委託し、分析結果の概要を掲載した。
6. 掘図の方位は国土調査法による第III座標系の軸方向である。
磁北は $6^{\circ} 5'$ 西へ振った方向である。
真北は約 $1' 59''$ 東へ振った方向である。
7. 基準点設置及び調査区周辺地図・方眼図作成は株式会社ワールドへ委託して実施した。
8. 出土遺物、実測図及び写真は浜田市教育委員会に保管してある。
9. 本書の執筆編集は柳原が行った。

本文目次

I. 調査の経緯	1
II. 位置と歴史的環境	2
III. 調査の概要	7
1 試掘調査	
2 本調査	
IV. 小結	30
V. 自然理科学分析	39
・川向遺跡出土木偶の放射性炭素年代測定	
・川向遺跡発掘調査における自然科学分析	
(花粉分析・珪藻分析・樹種鑑定)	

巻頭図版目次

巻頭図版 1	国府地区遠景（北より）
巻頭図版 2	川向遺跡調査区全景（南西より）
巻頭図版 3	木偶
巻頭図版 4	木偶

挿図目次

第1図	川向遺跡位置図
第2図	川向遺跡周辺図（1）
第3図	川向遺跡周辺図（2）
第4図	表探・試掘調査出土遺物実測図
第5図	調査区位置図
第6図	調査区設定図
第7図	調査区南北十層図
第8図	F・G調査区第3層～11層主要遺物十層状況実測図
第9図	第3層～9層十層状況実測図
第10図	第10・11層出土遺物実測図（1）
第11図	第10・11層出土遺物実測図（2）
第12図	第10・11層出土遺物実測図（3）

- 第13図 F・G調査区黒色泥層(第13層)主要遺物出土状況実測図
 第14図 黒色泥層(第13層)山上遺物実測図(1)
 第15図 黒色泥層(第13層)山上遺物実測図(2)
 第16図 黒色泥層(第13層)山上遺物実測図(3)
 第17図 古市遺跡出土遺物実測図
 第18図 伊甘神社脇遺跡出土遺物実測図(1)
 第19図 伊甘神社脇遺跡出土遺物実測図(2)

表 目 次

表1 川向遺跡周辺遺跡概要

図 版 目 次

- 図版1 調査前(北より)
 図版2 調査後(北東より)
 図版3 遺物出土状況(南西より)
 図版4 F・G調査区全景(北東より)
 図版5 試掘調査T1調査区(北より)
 図版6 試掘調査T2調査区(東より)
 図版7 試掘調査T4調査区(北より)
 図版8 A調査区南北十層
 図版9 F調査区東四十層
 図版10 F・G調査区中央遺物出土状況(東より)
 図版11 F・G調査区中央遺物出土状況(西より)
 図版12 G調査区東側遺物出土状況
 図版13 G調査区中央遺物出土状況
 図版14 G調査区西側遺物出土状況
 図版15 F調査区北側遺物出土状況
 図版16 F調査区北側山崩又歓出土状況(南より)
 図版17 F調査区北側木偶出土状況(北より)
 図版18 砂層面横断状況
 図版19 墓戻作業状況
 図版20 出土遺物(1)
 図版21 出土遺物(2)
 図版22 出土遺物(3)
 図版23 出土遺物(4)
 図版24 出土遺物(5)
 図版25 伊甘神社脇遺跡他出土遺物

I. 調査の経緯

川向遺跡は島根県浜田市下府町に位置しており、二級河川下府川の河口から約500m上流の左岸にある。遺跡は散布地として知られており、浜田高校に採取品が所蔵されている。また、遺跡の一角にある中村昭美氏宅には環状石斧が保管されている（註1）。

浜田土木建築事務所より平成9年度に遺跡内を流れる多陀寺川の荒廃砂防事業計画が提示された。多陀寺側の流れる谷に砂防ダムを新設し、下府川への水路を敷設するものである。分布調査の結果、谷部は岩盤が露出しており、埋蔵文化財の存在する可能性は薄かった。平地部では現在でも弥生時代から中世にかけての遺物が散布している。遺物は細片が多く、耕作・水害によりかなり攪乱されると想定された。

このため、浜田土木建築事務所との協議を行い、平成10年度に試掘調査を実施することになった。試掘調査は平野部を中心とし、平成11年2月22日より3月4日まで実施した。試掘調査の結果、川に近い3つの調査区（T1～T3）で弥生時代から中世の遺物が確認された。この結果を受けて平成11年度に発掘調査と調査報告書作成を行うことになった。

発掘調査は調査事業対称地900m²のうち、264m²を全面調査の対称とし、平成11年6月24日から8月30日まで調査を実施した。調査の結果、弥生時代から中世にかけての土器・弥生時代末から古墳時代中期にかけての多量の木器が確認された。木器の中には中国地方初の木偶も含まれており、弥生時代の祭祀を考える上で非常に貴重な調査結果を得た。9月13日に木偶についての記者発表を行い、市郷土資料館で約半月一般公開を行なった。遺物整理と調査報告書の作成は8月31日から平成12年2月29日まで実施した。

註(1) 浜田市 1973『浜田市誌』下巻



第1図 川向遺跡位置図

II. 位置と歴史的環境

川向遺跡は島根県浜田市下府町50番地2他に所在し、石見地方と呼ばれる島根県西部地域のほぼ中央に位置する。この地域は山々が海岸付近までせまっており、河川河口部には沖積平野が広がる。遺跡は下府川と小河川である多陀寺川の合流地点に位置し、多陀寺川による扇状地形と考えられる。現標高約1.5~6.03mを測る。

この地域の遺跡は数としては少ないが、石見国分寺・同国分尼寺などが所在している。古代から中世にかけての石見国の中心と考えられ「那賀郡伊甘郷」に属す。現在、旧石器時代の遺跡は知られていないが、縄文土器が伊甘神社脇遺跡から1点見つかっている。黒曜石の石鎚が浜伊場遺跡（註1）・黒曜石剥片が大平遺跡・川向遺跡で見つかっている。

弥生時代

伊甘神社脇遺跡（註2）・下府廃寺跡（註3）・古市遺跡（註4）・上府遺跡（註5）などで遺物が確認されている。川向遺跡では環状石斧（註6）、上条遺跡（註7）では扁平紐式袈裟繩文銅鐸が2個体発見されている。銅鐸は正立した状態で埋められていたとされる。銅鐸の分類ではⅢ式に属すものである。

古墳時代

前期・中期古墳は確認されていない。中ノ古墳の墳形は不明であるが、横穴式石室が一部残っている。半場口古墳群は箱式石棺の1号墳、横穴式石室の奥壁のみが残る2号墳で構成され、いずれも墳丘は不明である。片山古墳は外護列石を廻らす二段築成の方墳で、全長6.4m、幅約1.7mの無袖形の横穴式石室が開口している（註8）。集落跡は確認されていないが、伊甘神社脇遺跡で手捏ね上器・壺・高杯を含む古墳時代中期頃の上器だまりが見つかっている（註9）。江津市との境の砂丘地に位置する大平浜遺跡・越井遺跡では古墳時代～古代の須恵器・土師器が見つかっている（註10）。

古代

石見国府は横路地区・伊甘神社脇遺跡・上府遺跡の3地点での推定地調査が行われたが、所在は確定されていない（註11）。奈古田窯跡は7～8世紀頃の須恵器窯で、中心部分は烟により破壊されていると考えられる（註12）。白鳳時代末には金堂と塔のみの法起寺式に近い伽藍配置の下府廃寺が建立され1町四方（約109m）の寺域が想定されている（註13）。石見国分寺は現在の金蔵寺境内にあり、1町程の寺域が想定されている。塔跡の一部などが調査され、白鳳期の

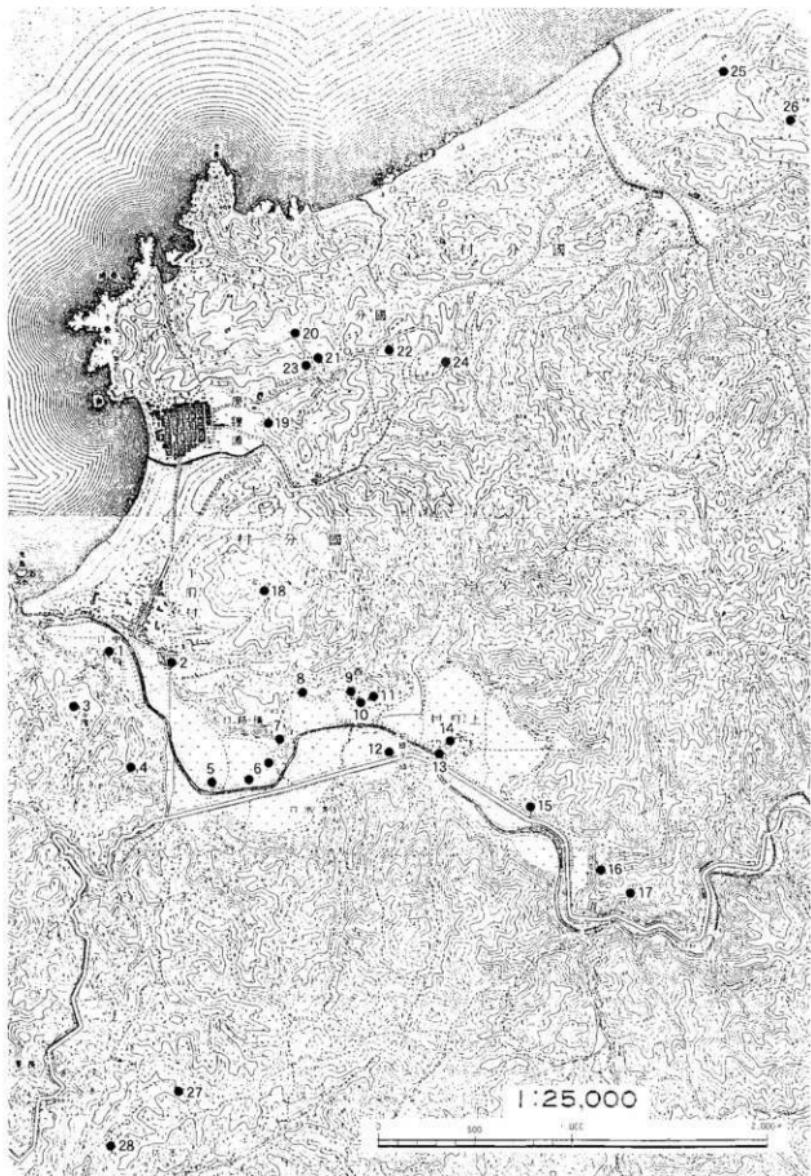
銅造誕生釈迦仏立像が出土している（註14）。国分寺塔跡から約100m南西側には、石見国分寺瓦窯跡が見つかっている（註15）。また、国分寺から約200m北西の谷をへだてた前場紙漉遺跡でも須恵器・瓦の散布が見られる。石見国分尼寺は現在の国分寺の境内に位置し、石見国分寺と同文の軒瓦や白鳳期の銅造誕生釈迦仏立像が出土している（註16）。

中世

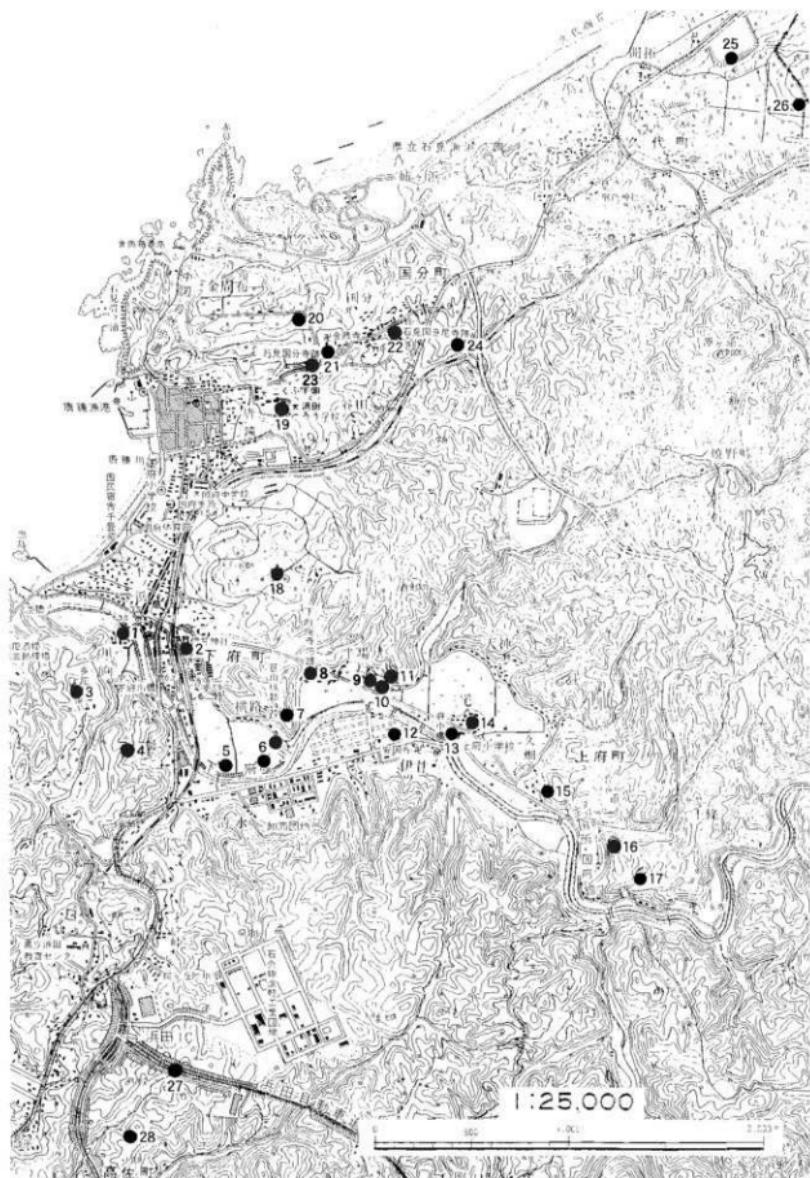
古代からの国府は新たに「府巾」として発展したと考えられる。府中の範囲は現在の上府・下府を中心とした地域と推定され、平安時代末から南北朝期まで栄えたと考えられる（註17）。古市遺跡（註18）・横路遺跡（註19）・伊豆神社脇遺跡（註20）・上府遺跡（註21）・下府廃寺跡（註

番号	遺跡名	種別	概要	註
1	川向遺跡	散布地	弥生～中世・環状石斧	6
2	伊豆神社脇遺跡	集落跡	弥生～中世・柱穴	2
3	多陀寺遺跡	散布地	須恵器・土師器	
4	中ノ古墳	古墳	横穴式石室	
5	横路遺跡（十器十地区）	集落跡	中世・掘立柱建物跡・墓	19
6	横路遺跡（原井ヶ山地区）	集落跡	古代～中世・掘立柱建物跡	19
7	笛山城跡	城跡	曲輪・堀切	
8	下府廃寺跡	寺院跡	塔心礎・金堂跡・瓦	3
9	半場口古墳群	古墳	1号墳・石棺？ 2号墳・横穴式石室	
10	住切遺跡	散布地	須恵器・土師器	
11	片山古墳	古墳	方墳・横穴式石室	8
12	古市遺跡	集落跡	古代～中世・掘立柱建物跡	4・18
13	宮宅山遺跡	散布地	須恵器・土師器・瓦	
14	上府遺跡	集落跡	弥生～中世・柱穴	5
15	新延遺跡	散布地	須恵器	
16	八反原城跡	城跡	曲輪・堀切・上界	
17	上条遺跡	祭祀遺跡	銅鐸2個体出土	7
18	大平遺跡	散布地	弥生～中世・黒曜石	
19	浜田ろう学校敷地古墳	古墳	消滅	
20	前場紙漉遺跡	散布地	須恵器・土師器・陶磁器・瓦	
21	石見国分寺跡	寺院跡	塔跡・誕生仏・瓦	14
22	石見国分尼寺跡	寺院跡	柱穴・誕生仏・瓦	16
23	石見国分寺瓦窯跡	窯跡	平窯・瓦	15
24	奈古田窯跡	窯跡	須恵器	12
25	大平浜遺跡	散布地	土師器・須恵器	10
26	越井遺跡	散布地	土師器・須恵器	10
27	浜伊場遺跡	散布地	土師器・須恵器・石鏡	1
28	苔蒲迫遺跡	散布地	磨製石斧・須恵器	

表1 川向遺跡周辺遺跡概要



第2図 川向遺跡周辺図 [1]・明治34年発行・番号は表1に対応



第3図 川向遺跡周辺図(2)・平成8年発行・番号は表1に対応

22) などで遺構、遺物が確認されている。現在の河口付近の川向遺跡や砂丘地である大平遺跡、上府八幡宮下の宮宅山遺跡からも遺物が確認されている。篠山城跡・八反原城（註23）も含め、広い範囲で中世遺跡が分布している。また、益田氏との関連が深く、伊甘山安国寺、伝御神本（益田）氏一代の墓、臼口大明神、上府八幡宮がある。また、明治23年の地籍図を見ると、現在の上府町三宅の平野には縦長の条理の痕跡が見られる（註23）。

- 註（1）日本道路公團広島建設局・島根県教育委員会 1985『浜伊場遺跡』
『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅱ
- （2）島根県教育委員会 1979『石見國府推定地調査報告Ⅱ』
- （3）浜田市教育委員会 1993『下府廐寺跡』
- （4）浜田市教育委員会 1992『古市遺跡発掘調査概報』
- （5）島根県教育委員会 1980『石見國府推定地調査報告Ⅲ』
- （6）浜田市 1973『浜川市誌 下巻』
- （7）直良信大 1932『右見上府村発見銅鐸の出土状態』『考古学雑誌22-2』
島根県教育委員会・朝日新聞社 1999『古代出雲文化展 -神々の国 悠久の遺産-』
- （8）大谷晃二 1993『片山古墳測量調査報告』『下府廐寺跡』浜川市教育委員会
- （9）前掲註2
- （10）江津市教育委員会・浜田市教育委員会 1988『大平山遺跡群調査報告書』
江津市教育委員会・浜田市教育委員会 1990『大平山遺跡群発掘調査報告書』
- （11）島根県教育委員会 1978『石見國府推定地調査報告Ⅰ』前掲註2・5
石井悠 1996『石見國府・國府 墓内・七道の様相』
日本考古学協会・重慶実行委員会
石井悠 1986『古代石見の役所跡について』
- 山本清先生喜寿記念論集『山陰考古学の諸問題』同記念論集刊行会
- （12）川原和人 1980『石見の須恵器窯跡』『さんいん古代史の周辺（下）』
- （13）前掲註3
- （14）山本清 1959『第六節 仏教』『新修 島根県史』通史編一
浜田市教育委員会 1989『石見國分寺跡第Ⅰ期調査概報』
内田律雄・江川幸子 1997『石見』
『新修 国分寺の研究』第7巻 補遺 吉川弘文館
- （15）内田仲雄 1986『石見國分寺瓦窯跡』
『島根県生糞遺跡分布調査報告書』 島根県教育委員会
- （16）国府町文化財審議会 1963『国府町の文化財』
内田律雄・江川幸子 1997『石見』
『新修 国分寺の研究』第7巻 補遺 吉川弘文館
- （17）益山市教育委員会 1996『第58号文書 解説』
『史料集・益山茅堺とその時代』
- 柳原博英 1998『島根県古市遺跡・横路遺跡と出土陶磁』
『貿易陶磁研究』No.18 日本貿易陶磁研究会
- （18）浜田市教育委員会 1995『伊賀土地区画整理事業に伴う 古市遺跡発掘調査概報』
前掲註4
- （19）浜田市教育委員会 1997『横路遺跡（土器土地X）』
浜田市教育委員会 1998『横路遺跡（原井ヶ市地X）』
- （20）前掲註2
- （21）前掲註5
- （22）前掲註3
- （23）前掲註5

III. 調査の概要

調査地は標高約1.5～4.8mの平野部と多陀寺川の流れる谷部である。対象地全体の分布調査の結果、旧水崎氏宅周辺の山際と谷部には岩盤（三群變成岩）が露頭しており、遺跡の存在する可能性は少ないと考えられた。対象地南東側は微高地となっており、現在も宅地が立ち並んでいる。

遺跡周辺の小字名は多陀寺川の流れる谷の出口が「水神森」、谷筋から南側は「上井ノ内」、北側は大半が「黒渕」、一部が「橋詰」である。調査対象地の小字はすべて「黒渕」である。

川向遺跡は以前より散布地として知られており、採取品が浜田高校や付近の個人宅に保管されている。現在でも遺物の採取は可能である。遺物の散布状況は微高地となっている一帯が最も多く、約1haに及んでいる。調査地は微高地の西縁辺に位置している。下府川の堤防が出来るまでは、水が山際までくることもあったようである。

1. 試掘調査（第5・6・7図）

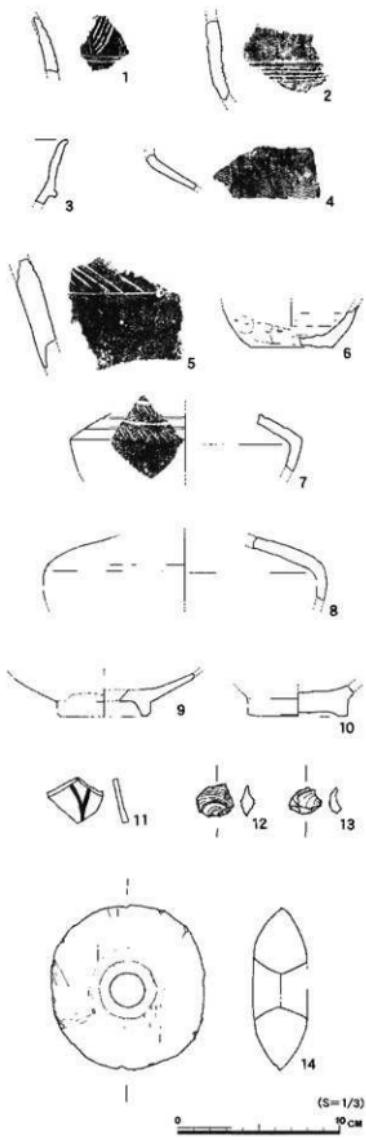
調査対象地内にまず2つの調査区（T1・T2）を設定して調査を開始し、一部は重機による調査を行なった（T4・T5）。最終的に5つの調査区の調査を行なった。なお、T2の遺物包含層は北側へ傾斜していたため一部未調査のまま埋め戻しを行なった。

T1

標高約1.89mの平地に設定した4m×4mの調査区である。弥生時代から平安時代後期頃の遺物が各層から出土した。暗褐色砂質土（3層）から平安時代後期の白磁片が見つかり、全体の遺物は中世以降に二次堆積したと考えられる。灰色砂質土（4層）で湧水がある。地表下約1.1mまで調査したが遺構は確認されなかった。

T2

標高約2.46mの平地に設定した2m×3mの調査区である。第1・2層は小礫を含む上層で石見焼に混じて弥生時代から平安時代後期頃の遺物が各層から出土した。第3層以下は砂が堆積しており、第14層の黄褐色砂（最高所約1.96m）は北方向へ緩やかに傾斜していた。それを覆うように第11層（黒色砂）が堆積しており、特に弥生時代から古墳時代にかけての遺物が右の間から出土した。黒色砂は調査区北側に厚く堆積し、遺物や右がかなり見つかったため、全掘はしなかった。石や土器が傾斜面に溜まるように見つかったことから当時の岸の一部と推定された。



第4図 表探・試掘調査出土遺物実測図

T 3

T 1とT 2の間に設定した $2\text{m} \times 3\text{m}$ の調査区である。弥生時代から平安時代後期頃の遺物が各層から出土した。第9層まで遺物は見つかったが、T 1と同様に二次堆積と考えられる。第8層（灰色中粒砂）で湧水がある。地表下約1.9mまで調査したが遺構は確認されなかった。

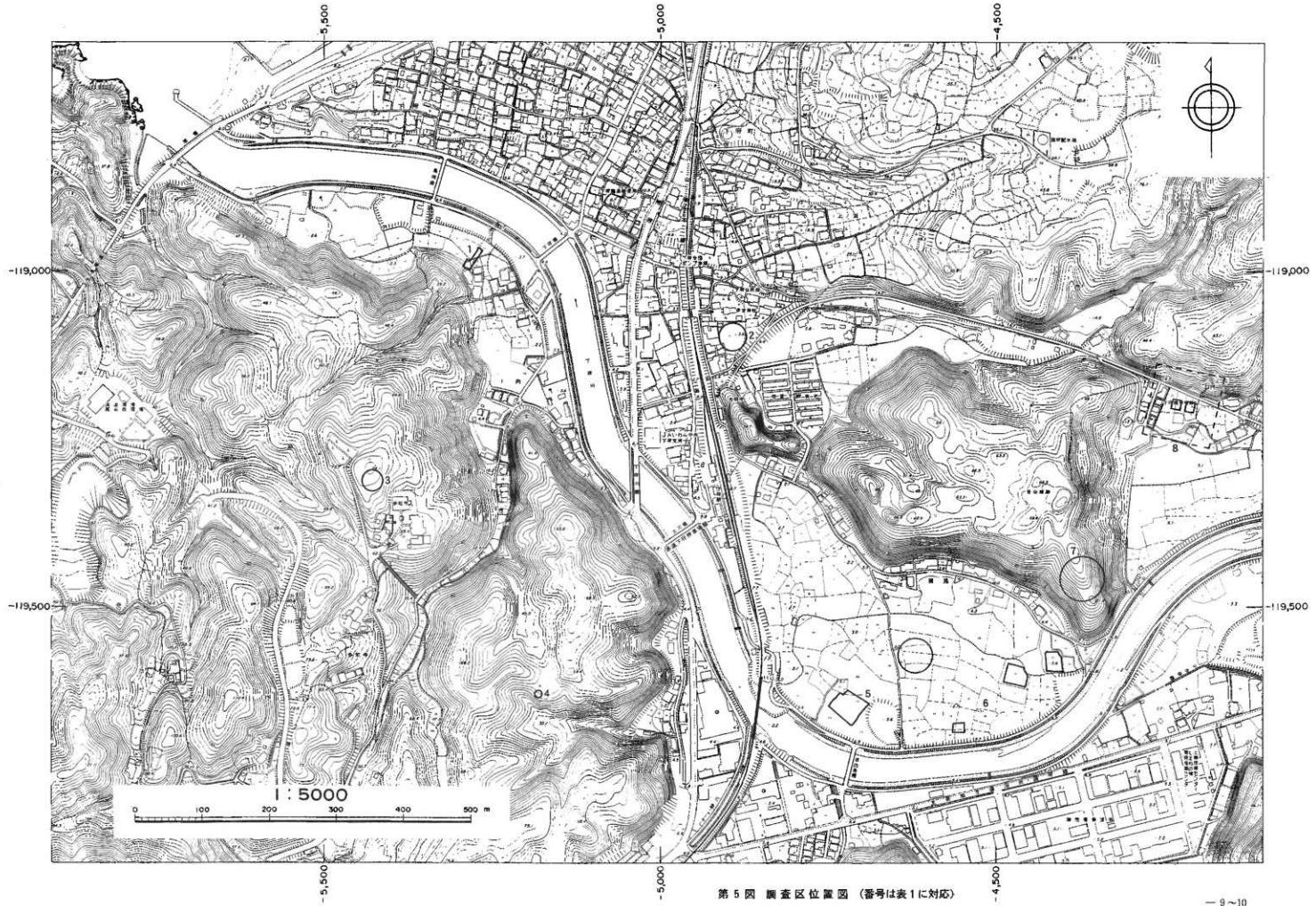
なお、最後に検出した第13層（黒色泥層）については試掘調査時は深さのため十分に調査できなかったが、本調査の結果弥生時代後期から古墳時代中期頃までの土器や木質を含むことが判明した。

T 4

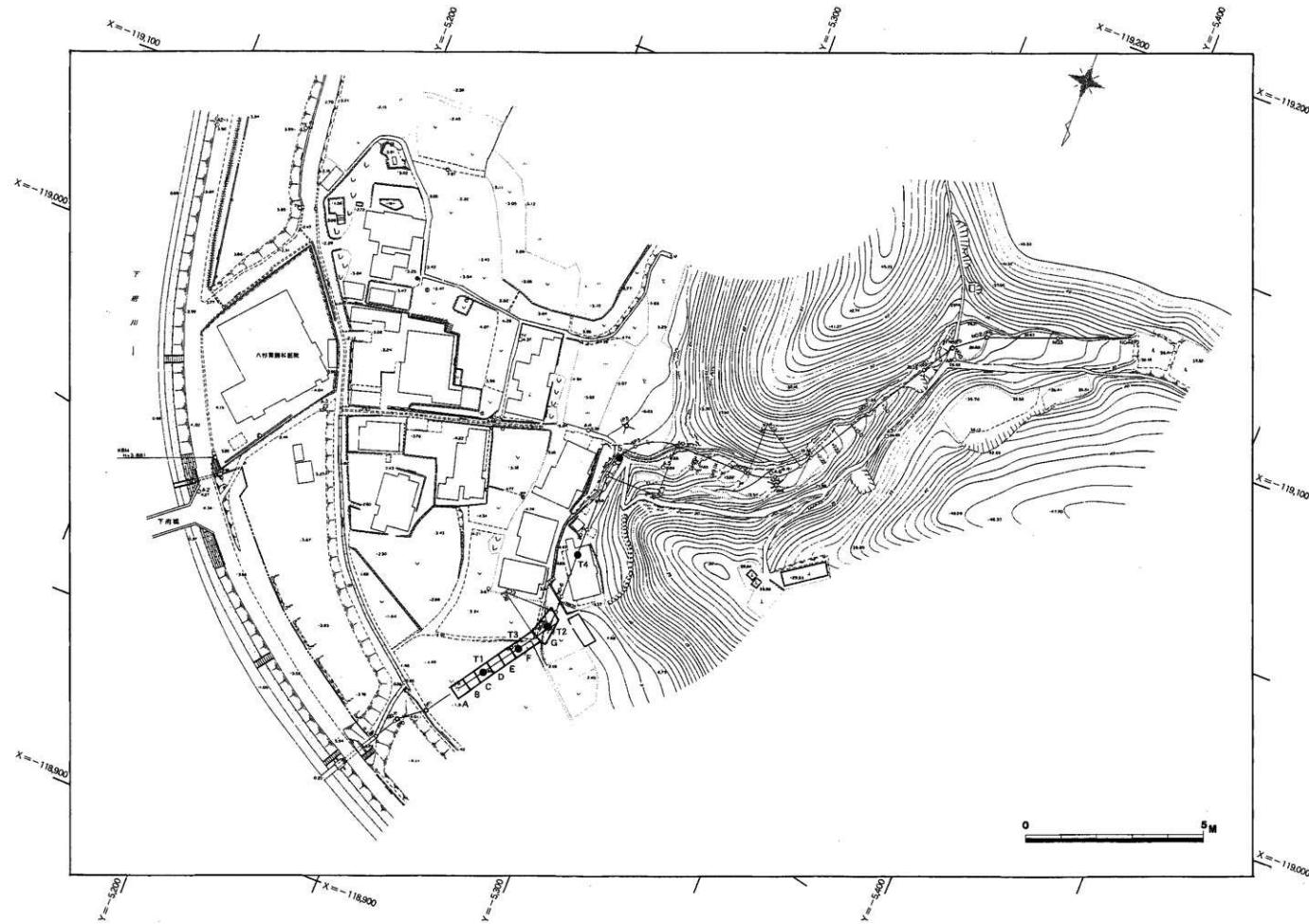
標高約4.8mの山際の宅地跡に設定した $1.5\text{m} \times 3\text{m}$ の調査区で、重機による掘削を行った。表土下約1.2mまでは宅地に伴う造成土が堆積しており、上師器細片と現代のカワラケが見つかった。標高約3.5mで黄褐色砂が確認された。約50cm掘り下げたが、遺物は見つからなかった。T 2で確認された褐色砂に対応する可能性がある。また、調査区西側（山側）では岩盤（三群変成岩）が確認された。砂堆の最も高い地点だが、砂の直上に造成土があり、包含層は削平されたと考えられる。

T 5

多陀寺川が流れる谷の出口に設定した $2\text{m} \times 2\text{m}$ の調査区で、重機による掘削を行った。表土下約1.4mで岩盤（三群変成岩）を確認した。遺構・遺物は確認



第5図 調査区位置図（番号は表1に対応）



第6図 調査区設定図

されなかった。

表探及び試掘調査出土遺物(第4図)

(3)・(7)・(11)～(14)は表探及び浜田高校所蔵品で、他は試掘調査出土品である。

(1)～(4)は弥生土器である。(1)はヘラと貝殻による施文が施されている。(2)はハケメによる段の下にヘラ描き沈線を4本施す壺の頸部と考えられる。(3)は複合口縁の壺片である。口縁端部はやや外反する。(4)は壺の肩部で薄く仕上げられており、外面に波状文が11本入る。(5)は厚手で壺の体部上半部と考えられる。ヘラ描きの綾杉文が一部残る。(6)～(8)は須恵器である。(6)は小壺類の底部と考えられる。(9)・(10)は白磁、(11)は青磁である。(9)は白磁碗II類、(10)は白磁碗IV類、(11)は外面に鎧蓮弁文を有す龍泉窯系青磁碗I～5類である(註1)。(12)は黒曜石の剥片、(13)は碧玉の剥片である。(14)は遺跡の範囲と考えられる現集落の個人宅に保管されていた環状石斧である。昭和初期頃には既に保管されていたということである。完全な状態で残っており、全面が研磨されている。

調査の結果、T 1～T 3 で弥生時代から鎌倉時代にかけての遺物が確認された。顕著な遺構(住居跡など)は確認されなかったが、T 1・T 3 は河川・水害などによる二次堆積層、T 2 は傾斜面に遺物の散布が認められた。現在の宅地と重なるように微高地上に弥生時代から鎌倉時代にかけて生活が営まれたと考えられる。

2. 本 調 査

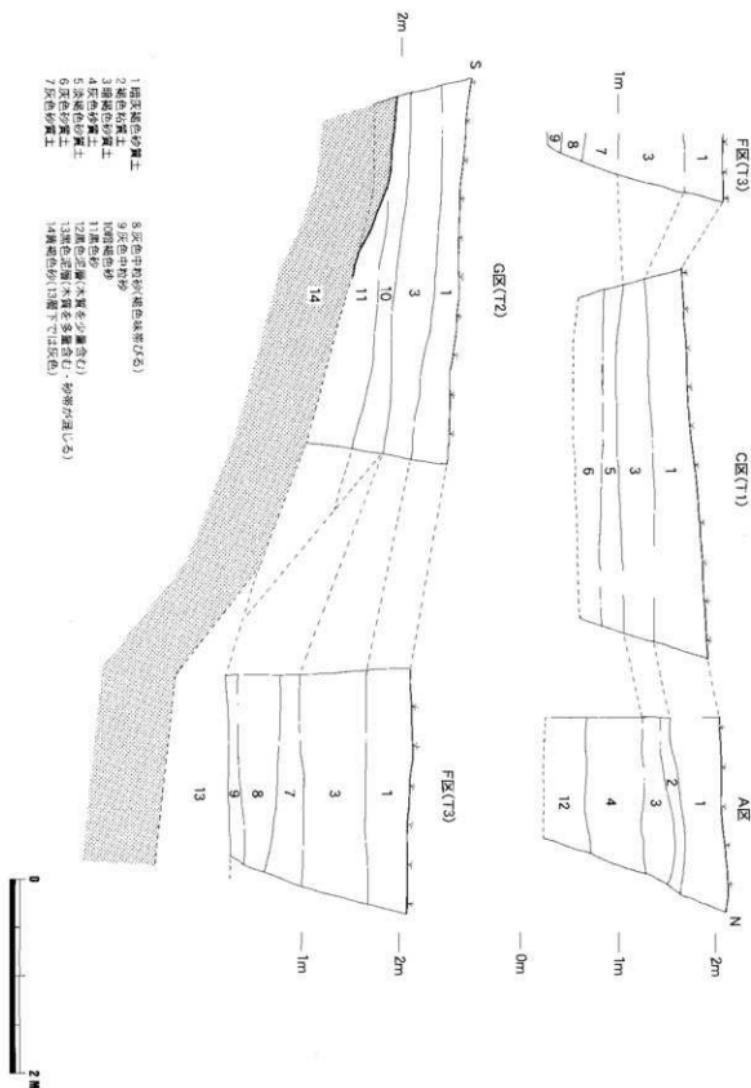
試掘調査の結果を元に、T 1～T 3を中心とする264m²の調査区を設定し全面調査を実施した(第5・6図)。

調査区を川側からA～G区とし、調査を開始した。確認調査の結果からA～F区では遺物の出土量は少く、G区では多いと想定された。

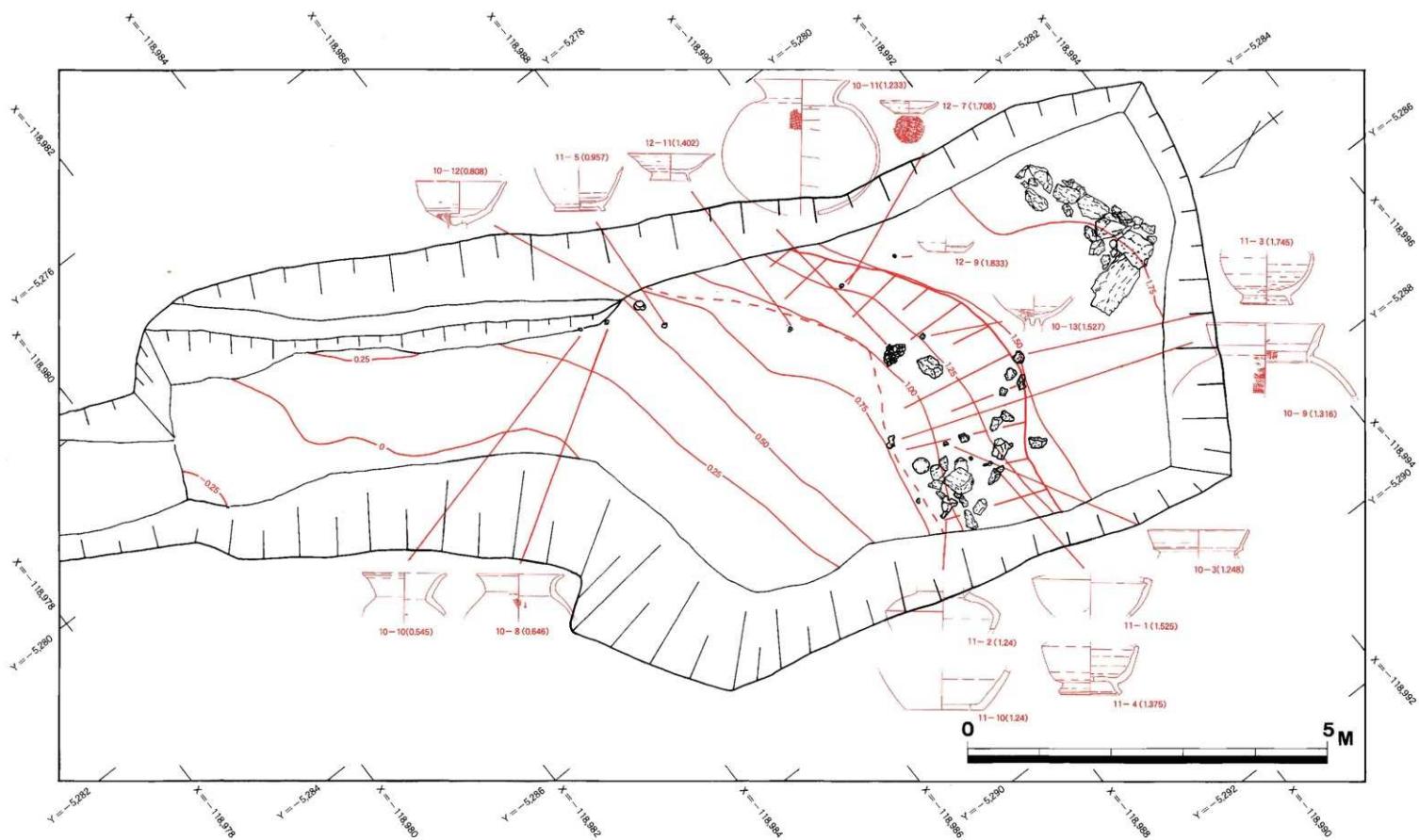
このためG区より調査を開始したが、無遺物層と考えられる砂層面が予想以上に北側に深くなり、木質が混じる黒色泥層が確認された。現地表より2m以上掘り下げた上に調査区の幅がせまく、斜面の崩落も始まったため、A～E区は部分的な深掘で黒色泥層の確認を行なうに留め、F・G区の調査に重点を置いた。

a) 調査区の層位(第7図)

土層は基盤となる砂層(第14層)がまず堆積する。この砂は山側が高く海からの風成砂である。下府川対岸には比高差約13mもの東西方向の砂帯が形成されており、墓地や民家がある。おそらくこの砂帯が形成されるまでに多陀寺川の扇状地北西側に貼り付くように砂堆が形成された



第7図 調査区南北土層図



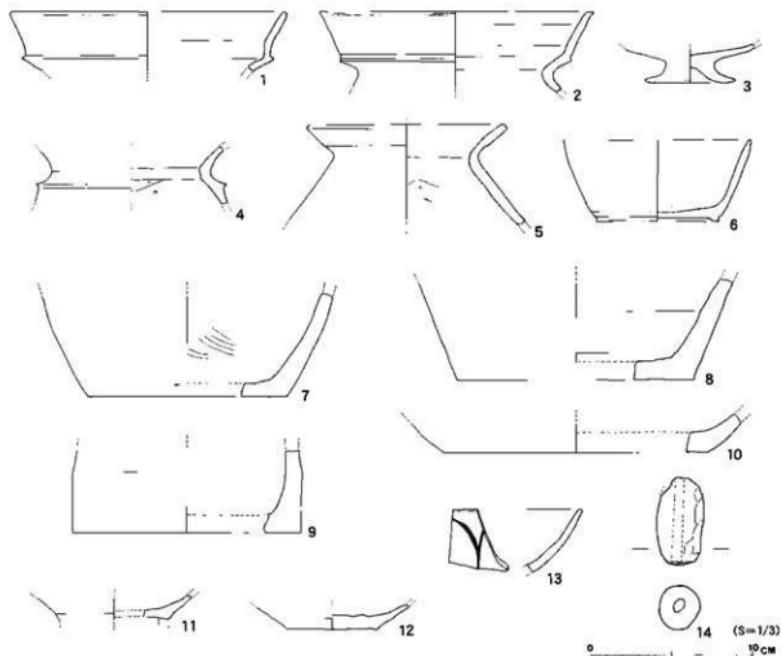
第8図 E・G調査区第3層～11層主要遺物出土状況実測図

等高線は調査終了時のもの・土器出土標高を()で示す
(S=1/6)

と考えられる。この砂層上の低い場所(標高約0.25m以下)に黒色泥層(第12・13層)、高い場所に黒色砂(第11層)が堆積する。黒色泥層は弥生時代後期から占墳時代中期、黒色砂は弥生時代前期～中世前半までの遺物を含む。黒色泥層は後背湿地になった際に堆積したと考えられるが、山側のF区では砂と粘土が互層になる場所が目立ち、川側のA区では砂はあまり見られなかった。後背湿地になった状態で、B区とF区の間は時々ごく浅い流路になった可能性もある。黒色砂には石や遺物がかなり認められた。黒色泥層と黒色砂の上に堆積した土(第1～9層)は破片が多く、川側では厚く堆積しており、細片がめだつ。おそらく中世前半以降に河川が安定し、堆積環境が変化していることが伺える。また、水害・耕作等により遺物が表面に露出していると考えられる。

b) 第3層～11層の調査(第8図)

第3層～10層までの遺物は破片が多いが、11層(黒色砂)ではかなり良好な状態で遺物が出土した。特にG区中央の傾斜面では遺物が多く出土し、鉄滓や羽口も見つかった。黒色砂は細分層できなかったが占い時代の土器が比較的下位にあり、中世前半の遺物は上位にあることか



第9図 第3層～9層出土実測図

ら長期間に渡り堆積したものと考えられる。調査区南側の最高所では三群變成岩が集積されたように見つかったが、性格は不明である。

第3層～9層出土遺物（第9図）

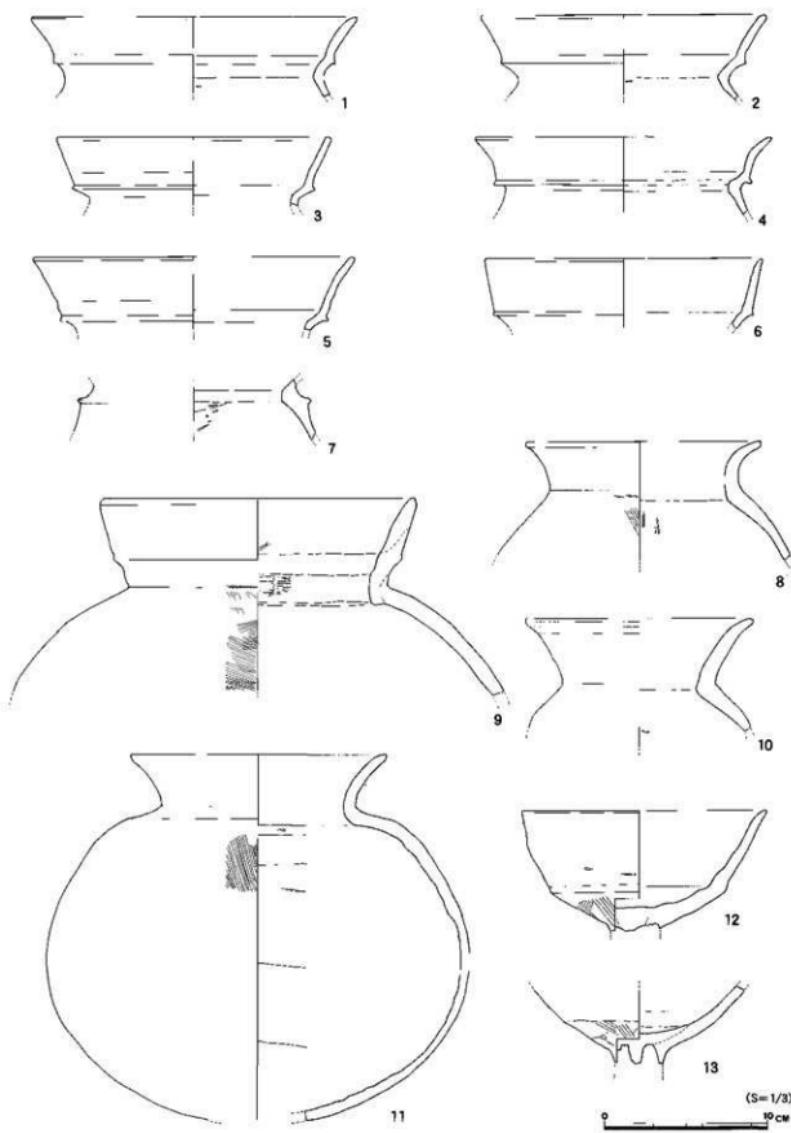
(1)・(2)は弥生土器の甕の口縁部である。いずれも無文である。(2)は口縁端部を屈折させる。(3)は低脚壺、(4)は鼓形器台である。(5)は土師器の甕だが、頸部が細く体部が直線的に広がるものである。(6)は須恵器の壺で底部はヘラ切りである。低い高台をつける。(7)～(9)は須恵器で壺類の底部と考えられる。いずれも平底だが、体部が丸みをもって立ち上がるもの(7)や真直ぐ上方へ立上るもの(9)などがある。(10)は備前系陶器の擂鉢底部である。内面は摩滅している。(11)は緑釉陶器で、高台は剥離している。胎土は土師質で釉は明るい緑色を呈す。防長産のものであろうか。(13)は鍋連弁文をもつ龍泉窯系青磁碗I～5類である。14は上錐で太い管状を呈す。外面には指頭圧痕が残る。

第10層・11層出土遺物（第10～12図）

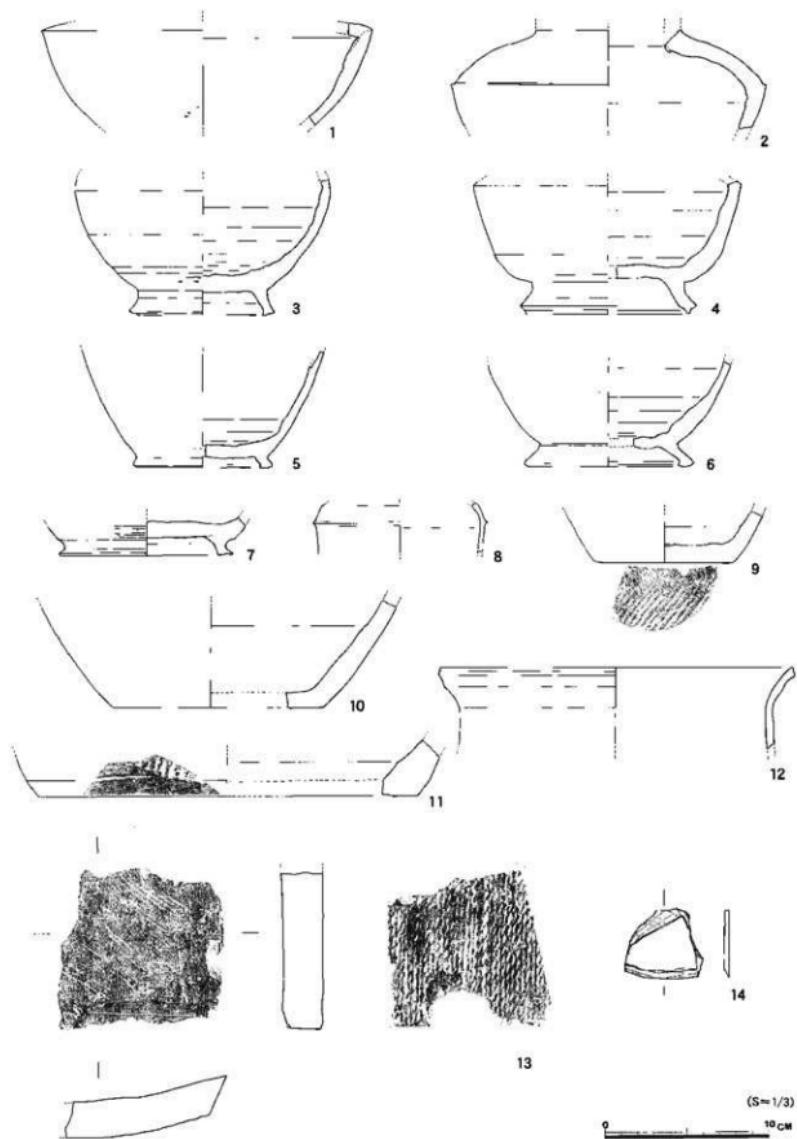
(第10図・1)～(5)は弥生土器甕の口縁部である。いずれも無文である。(4)は口縁を屈曲させるものである。(6)は口縁が直線的に立上る土師器である。(7)は鼓形器台である。(8)～(10)は土師器の甕である。(9)は複合口縁だが器壁が厚く直線的に口縁部をつくる。(11)は単純口縁で口縁は緩やかに外反する。肩が張り、体部は球形に近い丸底である。(12)・(13)は土師器の高杯である。いずれも脚部のはずれたものだが、脚部の破片は見つかなかった。いずれも脚と壺の接合は円盤を充填し、ユビオサエや粗いタテハケでおさえるものである。口縁部と壺部の境に明瞭な段がつくもの(12)とやや鈍いもの(13)がある。

(第11図・1～12)は須恵器である。(1)～(7)は長頸壺である。肩部が屈折するもの(1・2・4)と丸みをもつもの(3)がある。(3)は回転糸切り後に高台を接合しているが、他はヘラ切りである。長頸壺の破片は多く見つかったが、いずれも底部から肩部のもので口縁部は見つかなかった。(8)は壺で天井部と体部の境に突帯がつく。(9)～(11)は大型の甕・壺類の底部である。(12)は甕の口縁部と考えられ、薄手である。(13)は平底で凸面には繩叩き、凹面には布口痕が残る。(14)は黒色粘板岩で粗く刃部を作り出している。

(第12図・1)～(4)は土師器の甕である。様々な形態のものがあるが、(2)・(3)はやや小型で(4)は大型で受け口状の口縁部をもつと考えられる。(5)～(8)は土師器の皿、(9)は壺、(10)・(11)は高台付壺である。底部を円盤高台状に厚く造るもの(5)や底径が大きく器高が低いもの(6)などがある。(7)は口縁端部を上方へつまみあげる。(11)は灰白色を呈し、薄手につくる。(12)・(13)は白磁である。(12)は皿で内面見込みに段をもつ。(13)は大きい玉縁口縁をもつ碗IV類である。(14)・(15)は外面に鍋連弁文をもつ龍泉窯系青磁碗I～5類である。



第10図 第10・11層出土遺物実測図(1)



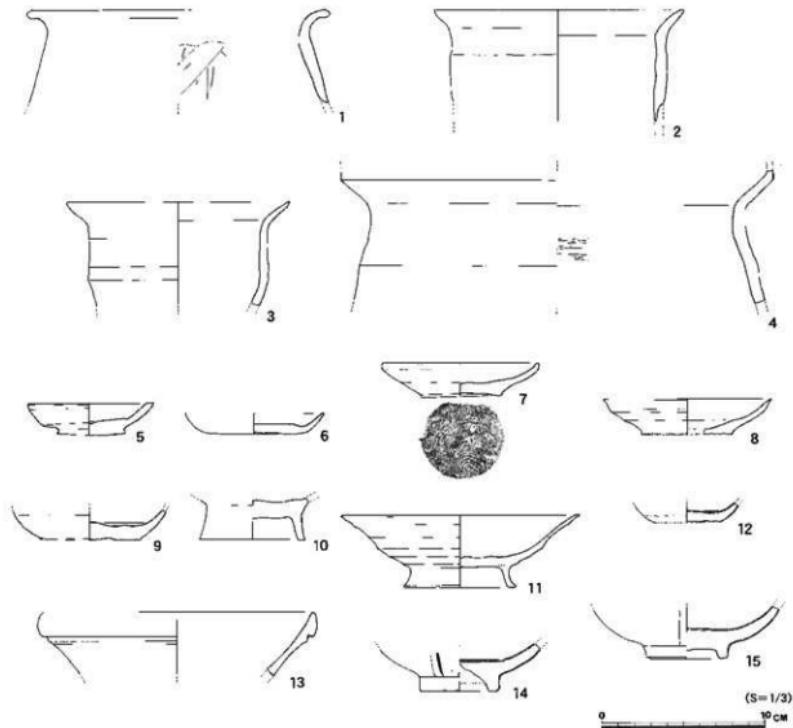
第11図 第10・11層出土遺物実測図(2)

c) 第13層(黒色泥層)の調査(第13図)

木質を多量に含む第13層(黒色泥層)は砂の傾斜面下場(標高約1m以下)に堆積していた。この層は砂帶と互層になる場所もあり、時々水が流れる湿地的な環境だったことが伺える。北側にむけて厚く堆積している。黒色泥層の下の砂層では多量の湧水がある。部分的な深掘の結果、すべての調査区で確認されたが、特にF・G区に木質が多く含まれていた。

木質溜はF区とG区それぞれまとまりがあるようにも見える。木質は標高0.092~0.4mの間で見つかり、特に標高0.14~0.3m付近にまとまりが見られた。傾斜面に沿うように見えるが、F区の北東隅では傾斜面に直交するようなものもある。大半が自然木だが、鋸・板材・杭など加工品が少量含まれる。また、炭化した木質もあり火を受けた可能性もある。木偶はF区の木質溜の最下位(標高0.15m)で、東方向に頭を向いた状態で見つかった。

木質に混じって弥生後期~古墳中期の土器が見つかった。弥生土器もG区傾斜面の下場西側



第12図 第10・11図出土遺物実測図(3)

で砂層にめり込んだような状態で見つかっている。土師器もG区傾斜面の下場西側に多いが、木質に近い場所で検出したものもある。

第13層(黒色泥層)出土土器(第14図)

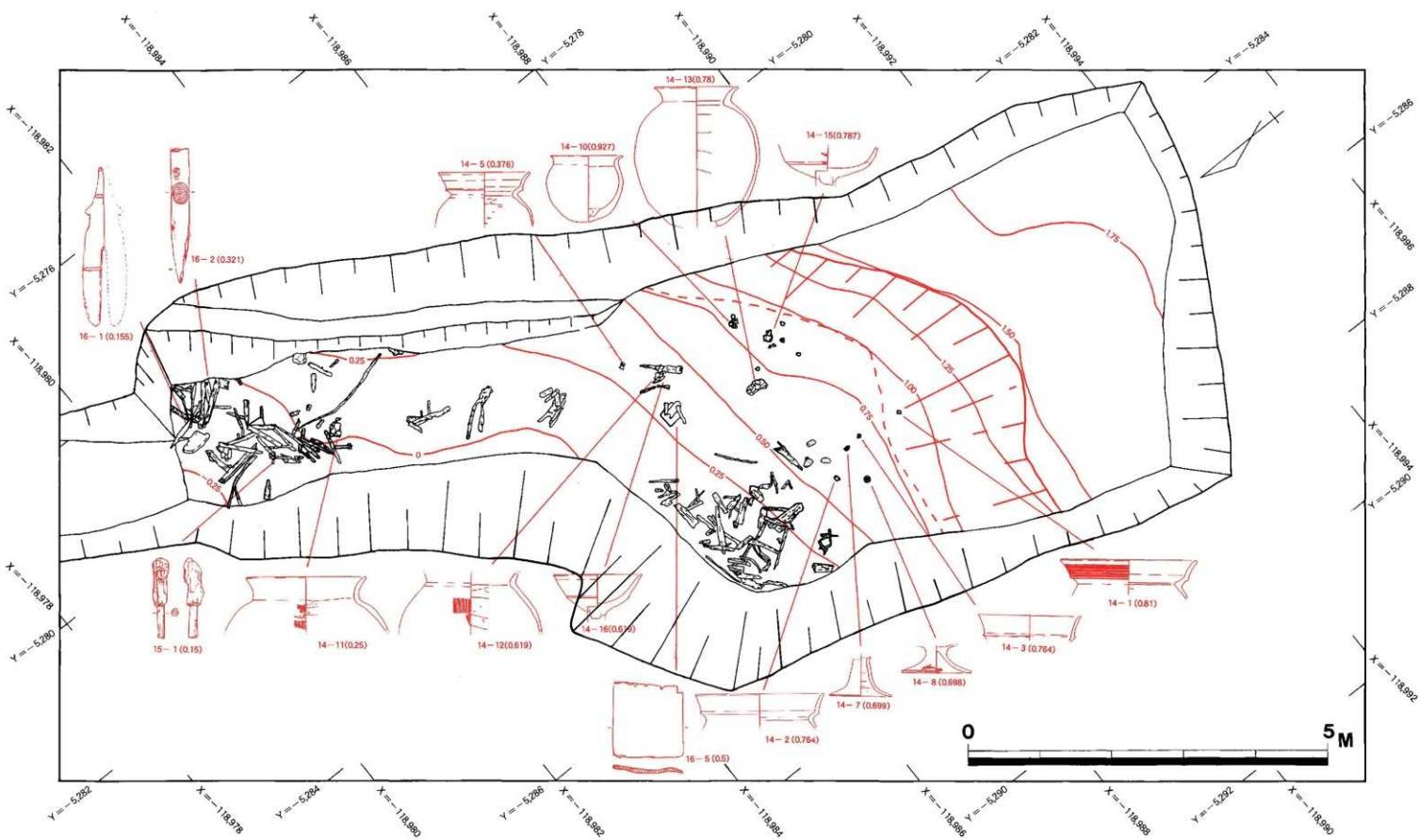
(1)～(5)は弥生土器の甕である。(1)は口縁部に擬凹線を施す。他はいずれも無文である。(6)は内外面をヘラミガキで仕上げるもので、小型の壺の可能性がある。(7)・(8)は高杯類の脚部である。(9)は弥生土器の底部で外面にはタテハケが残る。(10)は小型丸底壺で胴部下半はユビオサエによる凹凸がある。(11)～(13)は甕である。(11)・(12)は単純口縁で外面肩部には粗いタテハケを施す。(13)は全体を知り得る甕で、比較的硬質で焼きあがっている。単純口縁で体部は卵型になる。(14)～(16)は高杯である。いずれも口縁部と壺部の境に明瞭な段がつくが壺部の立上りがゆるやかなもの(15)ときついもの(16)がある。いずれも脚と壺の接合は凹盤を充填する。

第13層(黒色泥層)出土木製品(第15・16図)

(第15図・1)は木偶と考えられる。全長は27.2cmを測る。頭部(幅5.6cm・長さ8.3cm)と胴部(長さ8.1cm)と柄(長さ10.8cm・幅2.4cm)からなる。ヌルデの心材を削り出して作っているが、胴部には一部表皮や節が残る。細いあごをもち、眉と鼻を浅く削り出し、目と口は粗く彫り窪めている。C14年代測定の結果、YBP 1650±40の測定結果を得た。(2)は平坦面の裏側に結合のために幅3cm程の長方形の溝をつくる。机の天板の可能性もある。(16図・1)は曲柄又鍬で、軸部と半分が欠損している。笠の下のくびれから内弯しながら幅を増す。曲柄又鍬D III式と考えられ、弥生時代末～古墳時代中期にかけてのものである(註2)。(2)～(4)は杭と考えられる。杭と考えられる木製品は他にも出土しているが、いずれも先端を加工しただけのものである。(2)は表皮や節が残り、自然木の先端のみを斜めに粗く削ったものである。(3)は横断形が台形を呈し、先端部を3方向から大きく削り尖らせている。(4)も自然木の先端周辺を加工したものである。先端部は3方向から鋭く削って尖らせている。先端部のやや上方にV字状に横方向の切り込みを入れている。(5)は板材だが横断面はやや波打ち、木目が明瞭に残る。上部は破損しており、もとは長方形の板材と考えられる。(6)は長方形の板材に3ヶ所穿孔が施されている。中央の穴が大きく、両端の穴はやや小さい。

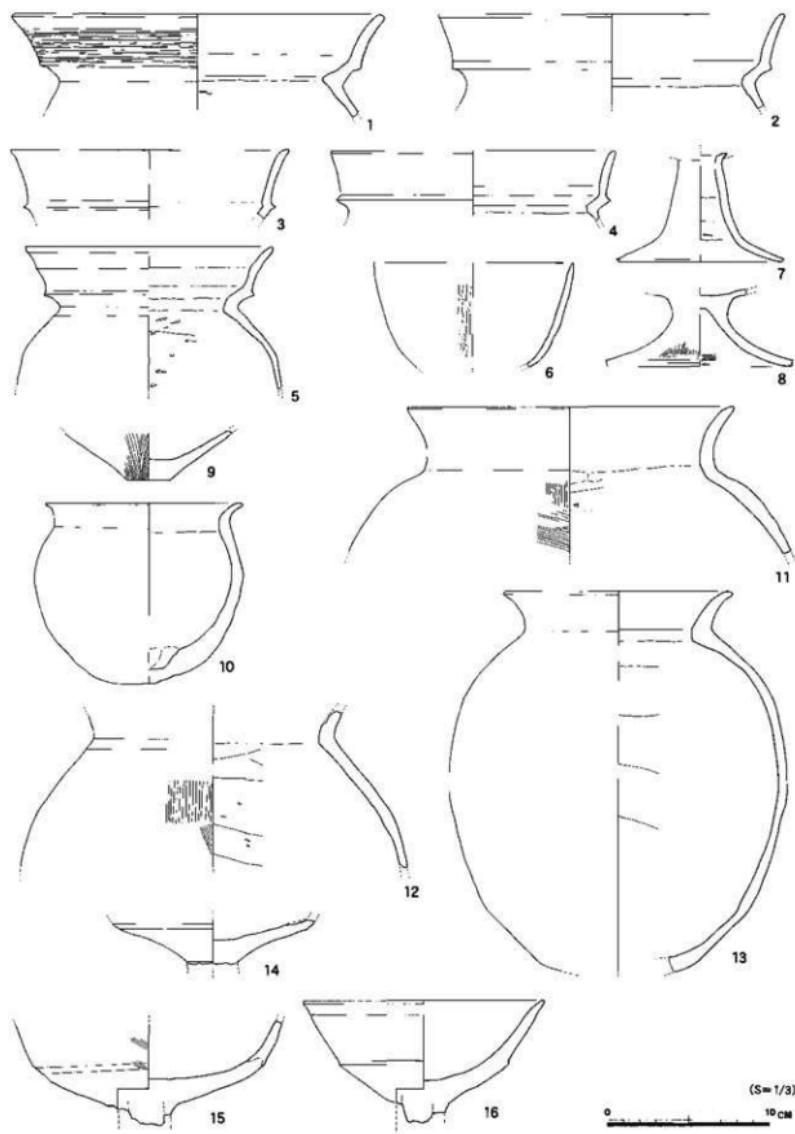
註 (1)貿易陶磁の分類と時期については以下の文献を主に参照した。

- 森田 勉・横川賛次郎 1978 太宰府出土の輸入陶磁器について
『九州歴史資料館研究論集4』
- 山本信夫 1995 “中世前期の貿易陶磁”
中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真閣社
- 山本信夫 1998 “中世前期の貿易陶磁器 …その分析視点と近年の研究動向…
『第26回 山陰考古学研究集会資料集 山陰における中世前朝の貿易陶磁器』
- (2)奈良国立文化財研究所 1993 『木器集成図録 近畿原始篇』

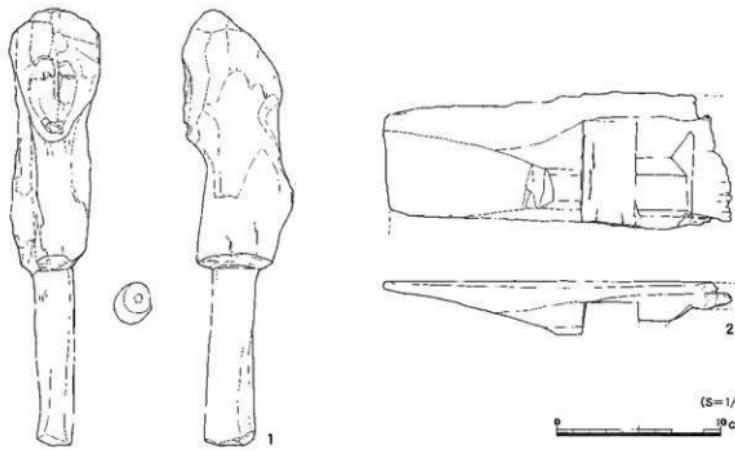


第13図 F+G調査区黒色泥層(13層)主要遺物出土状況実測図

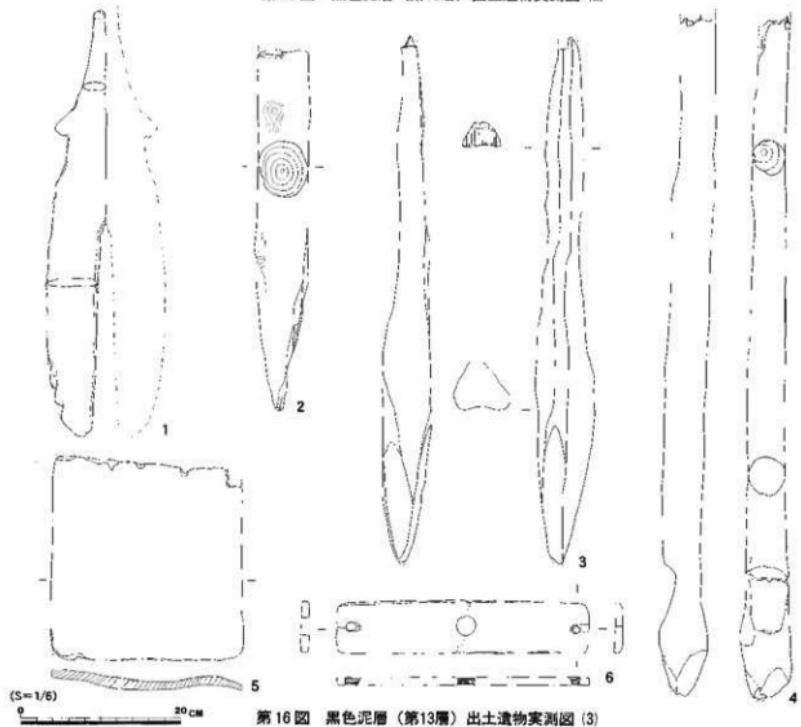
等高線は調査終了時のもの・遺物出土標高を()で示す
(14-16番を1/2に縮小)



第14図 黒色泥層(第13層)出土遺物実測図(1)



第15図 黒色泥層（第13層）出土遺物実測図（2）



第16図 黒色泥層（第13層）出土遺物実測図（3）

遺物観察表

種類番号	写真 版面	出土地点	種別	法縫 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	色(釉)調	胎土	地成
4-1	20	T2 黒色砂	弥生土器			ヘラと貝殻で施文。	淡赤褐色	1~2mmの砂粒多く含む	良
-2	"	T2 黒色砂	"			ハケノによる跡をつけ。ヘラを数回入れる。	淡黄褐色	2mm大の砂粒多く含む	良
-3	"	表接 (浜田高 校庭)	"		口縫端部を扭曲 させた。		灰白色	1mm人の砂粒多く含む	良
-4	"	T2 黒色砂	"			波状が1本以上入る。内面にカケズリ。	淡天褐色	0.5mm人の砂粒多く含む	良
-5	"	T2 黒色砂	十師器			内面横ケズリ。ヘラにより施文。	淡黃褐色	0.5mm人の砂粒多く含む	良
-6	"	T2 黒色砂	須恵器	底径 5		底部トボクのケズリ。 内面は回転ナメ。	淡灰色	砂粒多く含む	良好
-7	"	表接	須恵器	口径 13		肩部は丸く彎曲す る。	青灰色	1mm人の砂粒多少含む	良好
8	"	T2	"	口径 17	肩部は丸く彎曲す る。	内外面ナメ。	青灰色 (外面に自然釉)	1mm人の砂粒少含む	良
9	"	T2	白磁	底径 5.8	高台内面を斜めに削 り削る。	体形外窓と内面に施 釉。化粧上あり。	淡黄白色	こまり悪い	良
-10	"	T1	"	底径 6.2	高台を低く削り 出す。	内面施釉。	灰白色	普通	良
-11	"	表接	青磁			外腹に蓮瓣文。内外 面施釉。	暗褐色	滑良	
9-1	"	G北側	弥生土器 豊	口径 17.2			淡黄褐色 (赤み強い)	1mm大の砂粒を少 量含む	良
-2	"	P拂土	弥生土器 豊	口径 17	口縫端部はやや 外方に凹折する。		淡黄褐色	0.5~1mm大の砂粒 を多く含む	やや不良
-3	"	P拂土	弥生土器 豊	底径 5.6			淡灰褐色 (内面釉か弱り)	0.5mm大の砂粒を多 く含む	良
-4	"	拂土	鏡形器台			脚部内面はヘラケズ リ。	暗褐色	1mm大の砂粒を少量 含む	良好
-5	"	G北側溝	十師器 豊	口径 12.4	口縫は逆八の字状 に開く。体部は直 線的に立ち上る。	体部内面はヘラケズ リ。	淡灰褐色	1mm大の砂粒を多く 含む	良
-6	"	G北側溝	須恵器 壊	口径 11.6 底径 7.6 高さ 5.1	ごく低い高台を 付ける。	底部はヘラ切り。	淡青灰色	1mm大の砂粒を多く 含む	良好
7	"	F溝	須恵器 盆	底径 12.2	平底。	体部内面ヘラケズリ。 同心円凹凸の後ナメ。	淡青灰色	1mm人の砂粒を微 量に含む	良
-8	"	F溝	須恵器 盆	底径 14.7	平底。		暗灰色 (内 面墨灰)	1mm人の砂粒を微量 に含む	良
-9	"	F 毛色貼付	須恵器 盆	底径 14.2	平底から体形が 直線に立ち上る。		淡灰色 (一 部暗灰色)	1mm大の砂粒を少 量含む	不良
-10	"	F 黒色砂	輪削削 塵	底径 16.3	内面は厚壁。		赤褐色	1~2mm大の砂粒多 く含む	良
-11	"	G区	綠釉内附	底径 6.8	内外面に綠釉	胎内高台+弥生土器質	淡绿色	淡黄褐色・軟質	良
-12	"	F区	十師器 壊	底径 5.6		底部は回転糸切り。	淡赤褐色 (内面暗褐色)	0.5mm大の砂粒微量 に含む	良
-13	"	F+G拂土	青磁 瓶			外面に蓮瓣文	淡绿色	滑良	
-14	"	拂土	十鉢	径 2.5 長さ 5.4		外面に指壓痕痕残る。	淡黄褐色	1mm人の砂粒多く 含む	やや不良
10-1	"	C上手	弥生土器 豊	口径 20.2		体部内面は横方向の ケズリ。	淡赤褐色 (内面暗褐色)	1mm人の砂粒多く 含む	良好
-2	"	C黒色砂~白 色砂	"	口径 17.6		体部内面は横方向の ケズリ。	淡天褐色 (内面暗褐色)	1mm大砂粒少含む	良好
-3	"	C黒色砂	"	口径 17	口縫端部に石子 面がある。		淡青褐色 (口 縫内に裏題)	1mm大の砂粒砂粒 微量に含む	良好
-4	"	G南側墨色砂	"	口径 18.4	口縫は外方へ 屈曲する。	体部内面は横のケズ リのちナメか。	淡灰褐色 (赤み青びる)	0.5~2mm大の砂粒 多く含む	良好
-5	"	G南側墨色砂	"	口径 20			淡青褐色 (内 面墨色)	1mm大の砂粒少 量含む	良好
-6	"	G南側黑色砂	十師器 豊	口径 17.2			淡青褐色 (内 面墨色)	砂粒微細に含む	やや不良
7	"	G南西周辺	鏡形器台			脚部内面はヘラケズ リ。	灰白色	1~2mm大の白色、 褐色砂粒多く含む	良好
-8	"	G黑色砂	土師器 口縫部突出	口径 14.5	口縫は外方へ大 きく凹曲する。	体部表面ナメテハケ。体部 内面墨色とヨコのアズ ミ。	淡赤褐色	1~3mm大の砂粒 を多く含む	良
9	21	G黑色砂	土師器 豊	口径 19.1		体部表面に墨タケ色甚 く底面も同様の色。	淡青褐色 (外 面墨色)	0.5mm人の砂粒僅量に 含む	良
-10	"	G黑色砂	"	口径 14.1 以上		体部内面は横方向の ケズリ。	淡青褐色 (中 央をひびく)	1~4cm大の砂粒多 く含む	やや不良

辨証番号	写真 図版	山土地点	種 別	法呂(cm)	形態的特徴	手の特徴	色(袖)調	胎 上	地成
10-11	21	G黒色砂	土器窓 要 口縁～底部 另残存	口径15.8、 胸添最大 径26.1、 高さ15.1、 外部高さ3.5	口部がはり、体 部は球卵形の丸 底になる。	体部↓茎にタテハケ。下 部は凹凸がある。体部大 きな場合は横方向のケズ。 耳部はさく上りはま つし、体部上部に 開口部がある。	淡黄褐色 (口縁に黒 斑あり)	1～5mmの大砂粒 多く含む	良
-12	"	G黒色砂	土器窓 高環(脚欠損)			耳部はヨコカズイのナ ダ。下方山腹接合(左量光 開口ナダ)。ナダハ	淡赤褐色 (口縁に黒 斑あり)	1～4mmの白色粒少 量含む	良好
-13	"	G黒色砂	"		环部はややゆる やかに開く。	下位は脚部接合(円 筒充筋)の後指オサ エ、タテハケ。	赤褐色	1～2mmの大砂粒多 く含む	良
11-1	"	G黒色砂	須恵器 盖	底径20.1	肩部は遙く延び する。		青灰色	1mmの大砂粒微量含 む	良
-2	"	G黒色砂	"	底径19.4	肩部が延びる。	肩曲部に段がつく。	青灰色(外唇 上に白粉附)	精良	精良 (粉附)
-3	"	G黒色砂	"	底径7.6	肩部は同じ曲線 する。やや高い 両台がつく。	底部は回転糸切り後 に高台を接合する。	暗赤褐色 (内面は灰色)	砂粒少量含む	良好
-4	"	G黒色砂	"	底径10	肩部は高く開く。 低い両台がつく。	底部は高台のため凹 凸が多い。	青灰色(外 面に自然)	白色粒多く含む	やや 不良
-5	"	G黒色砂	"	底径8.6	低い両台から直 通力で体部が開く。	底部はハラ切り後に 両台を接合する。	淡灰色(内 面青み強い)	0.5mmの大白色粒含 む	やや 不良
-6	"	T2上層	須恵器 盖	底径10.6	外方に大きく開 く両台を付ける。		淡灰褐色(内 面青褐色)	白色粒多く含む	やや 不良
-7	"	G南黑色砂	"	底径10.8	低い両台を付け る。	底部はハラ切り後 に高台を接合する。	暗青灰色	1mmの大砂粒多く含 む	良
8	"	G黒色砂	須恵器 盖				暗青灰色	3mm人の砂粒含む	良好
-9	"	G北側褐色砂	須恵器 盖	底径8.4	平底。	底部には平行叩き痕 が現る。	暗青灰色	白色粒多く含む	良
-10	"	G黒色砂	"	底径14	平底。		淡灰色(外 面に自然)	1mm人の砂粒多く含 む	良
-11	"	G黒色砂	"	底径23.4	平底。	外側下部はナダ一 般平行叩き	淡灰色	黑色粒微量に含む	良
-12	"	黒色砂	須恵器 盖	口径21.8	得手で外側へ開 く。		暗青灰色	1mmの大白色粒微 量に含む	良
-13	22	G漆上	半瓦			内面は暁月、背面に 布目模。	淡灰白色	1.5mm人の砂粒少量含 む	良
12-1	"	G上手中	土器窓 窓	口径18.8	口縁は外方へ大 きく糊く。	体部内面はタテのケ ズリ。	淡褐色(内 面青褐色)	1mmの大砂粒を多 く含む	良好
-2	"	F黒色砂	土器窓 窓	口径15.4	口縁は外方へ張 り、体部は直線的。		淡褐色(内 面青褐色)	0.5mm人の砂粒微量 に含む	不良
-3	"	F+G黒色砂	土器窓 窓	口径13.8	口縁は外方へ直 線的に長く開く。		暗灰褐色(外 面青褐色)	0.5mm人の砂粒量に 含む	不良
-4	"	"	上部窓 窓	口径26.8	口縁は外方へ張 り、口部になら。	体部内面は横の粗い ハゲ。	暗灰褐色(外 面に煤青色)	0.5mmの大砂粒多く 含む	不良
-5	"	"	土器窓 窓	底径6.2 底高4.3 高さ2	底部はやや厚く 造る。	底部は回転糸切り。	赤褐色	黑色粒、赤褐色 を微量に含む	良好
-6	"	"	"	口径6.6 底高3.6 高さ1.3	高部に対して底 部が大きい。	底部は回転糸切り。	淡赤褐色	赤褐色粒を多く含 む	良好
-7	"	F+G黒色砂	土器窓 窓	口径9.9 底径4.8 高さ2.2	口縁端部をやや上 方へつまあげる。	底部は回転糸切り。	淡赤褐色(外 面に赤色)	1mm人の白色粒を多 く含む	やや 不良
-8	"	"	"	口径10.4 底径5.5 高さ2.2		底部は回転糸切り。	淡灰褐色	0.5mmの大砂粒、褐 色粒微量を含む	良好
-9	"	"	土器窓 窓	底径6.2 底高4.3 高さ2		底部は回転糸切り。	暗褐色	砂粒を多く含む	不良
-10	"	G漆土	土器窓 高台付环	基部5.0cm 底径6.5	高く、直立した 高台がつくる。	高台は回転糸切り後 ナダで接合。	淡赤褐色	0.5mmの大砂粒を多 く含む	良
-11	"	G黒色砂	土器窓 高台付环	口径14.8 底径5.0 高さ2.0 底径2	全体が薄くつくる。	高台は回転糸切り後、 ナダで接合。	灰白色	0.5mmの大白色粒、 砂粒を多く含む	良
-12	"	F+G漆土	白磁 盆	底径4.1	内面に凹陷入浅く 欠歫が入る。		淡灰褐色で ガラス質	灰色、精良	
-13	"	"	白磁 棚	口径16.8	口縁を玉縁状に つくる。		灰白色(質 入あり)	白色、精良	
-14	"	G黒色砂	青磁 棚	底径5	体部内面に割り出 しの割離弁文を表す。		淡褐色	灰色、やや粗い	
-15	"	"	青磁 棚	底径5	体部内面に引山し の割離弁文を表す。		暗褐色、 ガラス質	灰色、精良	
14-1	"	G黒色泥罐	旁生土器 瓢	口径23	口縁外方に腹溝を9本有 し、本体内に筋のナダ。		淡褐色	1mm人の砂粒、赤色 粒を多く含む	良好

実測番号	写真版	出土地点	種別	法環 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	色(釉)調	胎 土	焼成
14-2	22	G黒色泥層	弥生土器 親	口径21.4			褐灰褐色(表面に風化あり)	0.5mmの砂粒を多く含む	やや不良
-3	"	"	"	口径17.2			淡黄褐色(外側褐色)	0.5mm以上の砂粒多く含む	良
-4	"	"	"	口径17.4			淡灰褐色	砂粒微量含む	やや不良
-5	"	"	"	口径15.4	口縁部外方へ開く。	体部内面は斜めとヨコケズ。	淡灰褐色	1mm人の砂粒を多く含む	やや不良
-6	"	"	弥生土器	口径12.4	肩手で横状につくる。	内面にはタチのヘラしがある。外側はやや左官方向のヘラしがある。	淡黄褐色	1mm人の砂粒微量に含む	良好
-7	"	G黒色記層	弥生土器 高环	底径10.4		底部上位はタチハケ。内面は横のケズ。	淡灰褐色	0.5mm以上の砂粒を微量に含む	やや不良
-8	23	"	弥生土器脚部	直径11.4		外底にタチ方向、内面はヨカハケメ。	淡灰白色	0.5mm以上の砂粒を微量に含む	良
-9	"	F黒色記層	弥生土器	底径2.6	平底。	外側は範方向のハケ。	灰褐色(内面に豊富)	0.5mm人の砂粒を少く含む	やや不良
-10	"	上部唇 小型丸底盃	口径12.3	口縁は短く外反する。	体部内面ハケ無ナ。外側はナ。底部外底は指紋状。	淡黄褐色(内面赤み強)	1mm人の砂粒、赤褐色を少量含む	良好	
-11	"	"	上部器 親	口径20.2	口縁は緩やかに外反する。	底部はタチハケ。内面はヨカのケズ。	淡灰褐色	1~5mmの砂粒を少量化む	良
-12	"	"	上部器 親		体部は卵形になる。丸底。	体部外側に上部は横のケズ。下部は斜入角のケズ。体部内面はヨカのケズ。	淡黄褐色(内面下位黒い)	1~5mm人の砂粒を少量化む	やや不良
-13	"	"	上部器 親	口径12.5	体部は卵形になる。丸底。	体部外側に一部ハケ残る。体部内面はヨカのヘラケメ。	暗褐色(下半部に様)	精良	良好
-14	"	F木質漆	上部器 高环			外底は横ハケのち横ナ。	淡灰褐色	1~5mmの砂粒を少量化む	やや不良
-15	"	G黒色記層	上部器 高环			外底下位は複合焼成(円盤充満)のちユビオサエとナ。	淡黄褐色	1~5mmの砂粒を多く含む	良好
16	"	"	土師器 高环	口径35	環部の立上りきつい。环底下位に明確な設がある。	外底下位は複合焼成(円盤充満)のちユビオサエとナ。	淡赤褐色	1~5mmの砂粒を多く含む	良

実測番号	写真版	出土地点	種別	法量 (cm × g)	形態・手法の特徴	石材
4-12	20	表様 (浜田高校)	剥片	1.9×2.1 2.65 g		黒曜石
4-13	"	表様 (浜田高校)	剥片	1.6×1.9 1.92 g		碧玉
4-14	"	表様 (個人蔵)	葉状石斧	直径2.1 462 g	全体が研磨される。刃部に細かな欠損多い	玄武岩
11-14	22	G黒色沙	刀身	4.3×4.8 10.38 g	剥離面は大溝跡	黒色粘板岩

実測番号	写真版	出土地点	種別	法量 (cm)	形態・手法の特徴	樹種
15-1	23	H区木質漆	木製	全長27.2	輪・頭部・柄部を割り出す。	ヌルダ
15-2	"	H区木質漆	不明	全長21.6以上 幅5.5以上 厚さ3.3以上	平面面を作り出し、反対面は横の削込がある。	スギ
16-1	24	H区木質漆	曲柄又彌	全長63.1以上 笠部幅2.2 厚さ1	輪部欠損。1/2残る。笠の下のくびれから内側しながら幅を増す。	コナラ属 (アカガシ ヒバ)
16-2	"	F区木質漆	杭	全長45以上 幅5	先端を人さし斜めに切断し、周囲を鋸かく削る。他は自然面が多く、表皮も一部残る。	マツ属(後 櫛管火山樹)
16-3	"	H区木質漆	杭	全長66.22以上 厚さ最大5.6 幅最大1.7	横断面は台形を呈す。先端は大きく面を取って尖らせる。	スギ
16-4	"	G区木質漆	杭	全長81.7以上 幅4.5	先端を斜めに切断して尖らせる。横方向の剥込がある。他は自然面が残り、表皮も一部残る。	イヌガヤ属
16-5	"	G区	板材	全長25.5以上 幅31 厚さ最大1.3	木目が明瞭に残る。断面は歪みが大きい。	スギ
16-6	"	G区木質漆	板材	全長61.3 幅31 厚さ3.1 中央の穴直徑2.4 内側の穴直徑0.9	長方形の板材の中央と両端に穿孔する。	スギ

IV. 小 結

1 川向遺跡の立地について

調査の結果、弥生時代から中世にかけての遺物が確認された。調査区は現在の集落の北西端に位置しており、住居跡などの顯著な遺構は確認されなかった。

遺跡周辺の地形発達を概観すると、遺跡の基盤として砂層が堆積する。この砂は山側斜面にのし上がるよう海面より高く分布し、海からの風成砂である。下府川対岸には海からの風成砂により東西方向に砂丘が形成されている。この砂丘が発達するまでは多陀寺川の扇状地北西側に風成砂堆が形成され、海岸に近い場所だったと考えられる。おそらく弥生時代以前であろう。

この砂層上の低い場所に弥生時代後期後半～古墳時代中期の黒色泥層、高い場所に古代・中世の遺物も含む黒色砂が堆積する。黒色泥層は後背湿地になった際に堆積したと考えられる。遺跡周辺の地形を見ると、現在の国道9号線・下府駅辺りは両脇に山地が迫っている。この地形的制約から遺跡付近では下府川は流れを規制されて北へ行き、砂丘にあたり北西方向へ流れを変えて海へである。さらに西側から張り出すように多陀寺川の扇状地があるため調査地点は「流れの裏側」にあたる。このため、調査地点は河道に近いにも関わらず、流れの影響をうけにくい湿地的な環境が長く続いたと考えられる(註1)。

その後おそらく中世頃には河川が安定し、現在の地形に近い状況になったと考えられる。しかし川側のA～E区にはやや粗い砂層もある事から、時折水害に遭い、黒色泥層より上の層は二次堆積を繰り返していくと考えられる。表採遺物が川側に多く認められることもこのことを示している。

住居跡などは現在の集落と重なるように扇状地上にあると考えられ、調査地は集落の縁辺部に位置する。しかし、古墳時代の土師器や須恵器が良好な状態で見つかっていることは注意される。低い位置では弥生時代の木偶など木製品が少量見つかっていることと併せて、集落本体との関係の検討が必要と考えられる。

2 出土遺物について

出土遺物と表採品からみると、大まかに弥生時代から中世の遺物がある。主要遺物の点数は弥生土器308点、土師器(古墳～古代)301点、須恵器286点、中世土師器848点、白磁85点、青磁6点、瓦7点、上錐1点、綠釉陶器1点である。

弥生土器は前期と考えられる細片(第4図・1、2)もあるが、大半は弥生時代後期後半から終末のもので中期のものは未確認である。ただし調査区が集落縁辺部にあり、調査面積が狭いことからも即断はできない。

瓶・甕類の上縁部は複合上縁のもののみが見つかっており、ほぼ弥生時代後期後半から終末

にあたる。最も古い形態のものはやや厚手で外面に擬凹線を施すもの(第14図・1)だが、この1点のみである。他に口縁端部を細くつくるもの(第10図・4)、口縁の稜が水平方向へでもとの(第14図・3)、口縁端部を丸めにつくり上端に若干面をもつものの(第10図・3)がある。弥生時代後期の土器は松本編年V-3・V-4様式(註2)にあたり、特に松本編年V-4様式のものが多い。さらに後出と考えられるものは口縁上端が面をもって横へ延びるもの(第9図・2)であるが、この一点のみである。

木製品は木偶(第15図・1)が注目される。ヌルデの自然木を表皮を残しながら顔・胴・柄を削りだしている。木偶は農耕の神や祖靈神を祭るための祖先をかたどった人のシンボルと考えられており、徳島・大阪・滋賀・愛知・石川から11数例出土しており、中国地方初の出土である(註3)。

木偶の変遷は弥生時代前期の串状のものから、中期に性差を表現した中・大型品へと発展し、後期は胸部棒状のものに小型化するとされている(註4)。川向遺跡出土例は弥生時代後期後半から古墳時代中期の土器と共に存しておらず、大きく弥生時代後期後半から終末として差し支えないと考える。前述の形態変遷もこれを補強するものである。木偶のC14年代測定の結果、YB P1650±40の測定結果を得ている。

曲柄又鋤も石見地域ではじめて見つかったものである。曲柄又鋤DⅢ式と考えられ、大きく弥生時代後期～古墳時代中期にかけてのものである(註5)。また、いずれも表採だが黒曜石・碧玉といった石材も見られ、石器生産も行なっていた可能性がある。

古墳時代中期の土師器は比較的多く見つかったが、甕と高坏が中心である。他に小型丸底壺(第14図・10)もみられる。甕は鈍いつくりの複合口縁のもの(第10図・9)、単純口縁で丸みをもつたくの字形になるもの(第10図・11)にわけられる。量は複合口縁のものが一点見つかったのみで他はすべて単純口縁である。同じ単純口縁でも口縁の長さが長いもの(第10図3)と短いもの(第14図・13)がある。体部が球胴形になるものは肩部に粗いタテハケを施すものが多い。高坏は口縁部と坏部の境に段をもつもの(第14図・16)と境が不明瞭になってくるもの(第10図・13)がある。量は前者が多い。これらは須恵器が普及する前後の時期と考えられる(註6)。この時期の資料として浜田市伊甘神社脇遺跡土器大まりや横路遺跡(原井ヶ市地区)C調査区、仁摩町清石遺跡土器溜などに出土資料がある(註7)。手捏土器、坏(碗)、高坏、小型丸底壺、直口壺、甕などが見られる。

須恵器では(第11図・8)の蓋が定型化した段階でも古いものである。天井部と体部の境に明確な突帯をもつもので山雲1期(註8)、日脚遺跡編年IA期にあたる(註9)。古い須恵器はこれ1点であり、前述の古墳時代土師器の年代を考える上で参考となろう。(第9図・6)の坏は底部をヘラ切り後に低い高台をつけており、石見空港予定地内遺跡編年III期、久木奥窓跡編年IV期にあたる(註10)。他の須恵器は長頸壺の破片が目立つ。底部の切り離しはヘラ切りと回転糸切りによるものがある。また、肩部が屈折するものと丸くなるものがある。瓦はいずれも平瓦片で7点見つかった。いずれも凸面に繩印痕、凹面に布目痕を残す。転用あるいは流れたもの

と考えられる。

中世の上師器は量的に最も多く見つかった。848点の内訳は底に穴をあけるもの22点、高台をもつもの19点、灰白色系のもの413点、褐色系のもの394点である。ほとんどが細片となっており、灰白色系の数が多くなっている。(第12図・11)は灰白色の高台付壺で古市遺跡I期にあたり、(第12図・6)の皿は底径に対して器高が低く古市遺跡III期以降と考えられる(註11)。

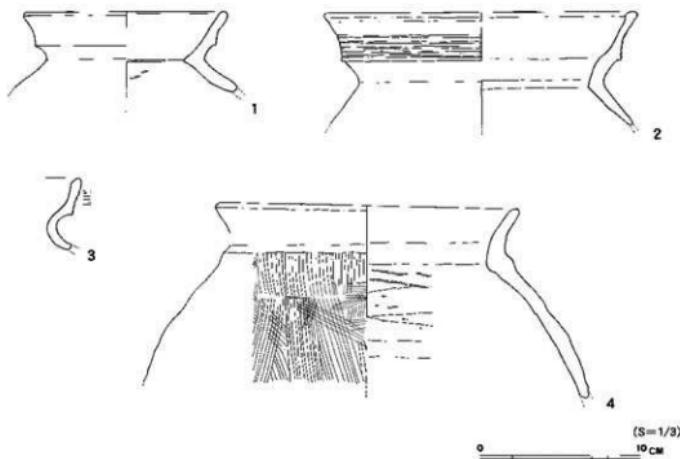
貿易陶磁器は白磁・青磁があるが、中世上器の内訳は上師器が圧倒的に多く、白磁が青磁に對して圧倒的に優勢である。白磁はほとんどが碗IV類で碗II類、碗V類、皿がごく少量ある。青磁は外面に鶴蓮弁文をもつ龍泉窯系青磁碗I~5類が多く、龍泉窯系・同安窯系のものが少量見られる。大宰府C期からE期にあたる(註12)。

川向遺跡も石見府中の範囲内と考えられ、下府川左岸で最も下流の集落と考えられる。(註13)

3 国府地区の弥生遺跡について

国府地区では弥生~古墳時代を中心とした遺跡は数としてはまだ少ないが、現在分かっている範囲で資料紹介してみたい。

古市遺跡は中世の町跡として知られている(註14)。中世遺構面下の砂層から弥生前期の甕細片と弥生後期から古墳時代中期の土器が少量出土している(第17図)。(1)は弥生土器の甕で全体的に摩滅している。口縁部は完全に残る。口径10.6cmを測り、淡灰褐色を呈す。やや分厚い複合口縁を造り、口縁部内外面はナデを施す。体部内面には横方向のヘラケズリを施す。(2)も同様に弥



第17図 古市遺跡出土遺物実測図

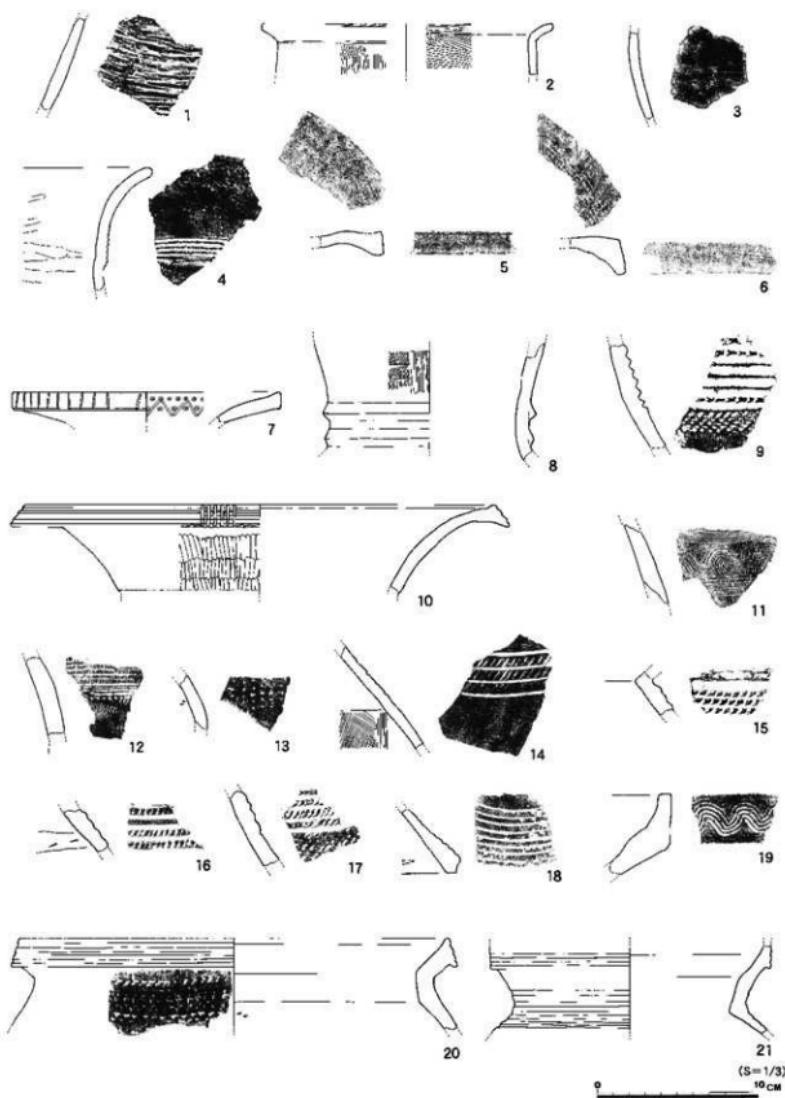
生上器の甕である。復元口徑19.4cmを測り、淡灰褐色を呈す。口縁端部が膨らむ複合口縁を造り、口縁外面に擬凹線を4本めぐらす。体部内面には横方向のヘラケズリを施す。(3)も同様の口縁部片で、全体が摩滅している。口縁外面には凹線が4本以上確認できる。(4)は古墳時代の土師器甕で、口縁部から体部上半は完全に残る。口徑18.6cmを測り、淡赤褐色を呈す。焼成がよく硬質である。緩やかに外方に開く口縁部をもち、全体的に器壁が厚い。胴部は丸みをもち、球形に近くなると考えられる。口縁外面は丁寧な横ナデを施し、体部との境は一段強いナデにより窪む。体部外面の上半は粗いタテハケ、以下はタテ・横・斜めのハケを施し、凹凸が多い。体部内面には横方向のヘラケズリを施し、肩部には粘土の接合痕が残る。

伊甘神社脇遺跡は1978年に石見国府推定地の二次調査として発掘調査が行なわれた(註15)。報告書の中には奈良時代以前の遺物が割愛されているため、ここで弥生土器を中心にその概要を示しておく。いずれも第II層(暗褐色)よりの出土で包含層出土のため、破片が多い。大きく前期から後期まであるが、やはり後期初頭から終末の土器がめだつ。古墳時代中期の土器だまりからは土師器がまとまって見つかっており、報告書に一部図化されている。組成は前述したが、高环の坏と脚を接合したのちに脚の接合部外面を強いナデで一段凹ませる個体があるのが特徴である。

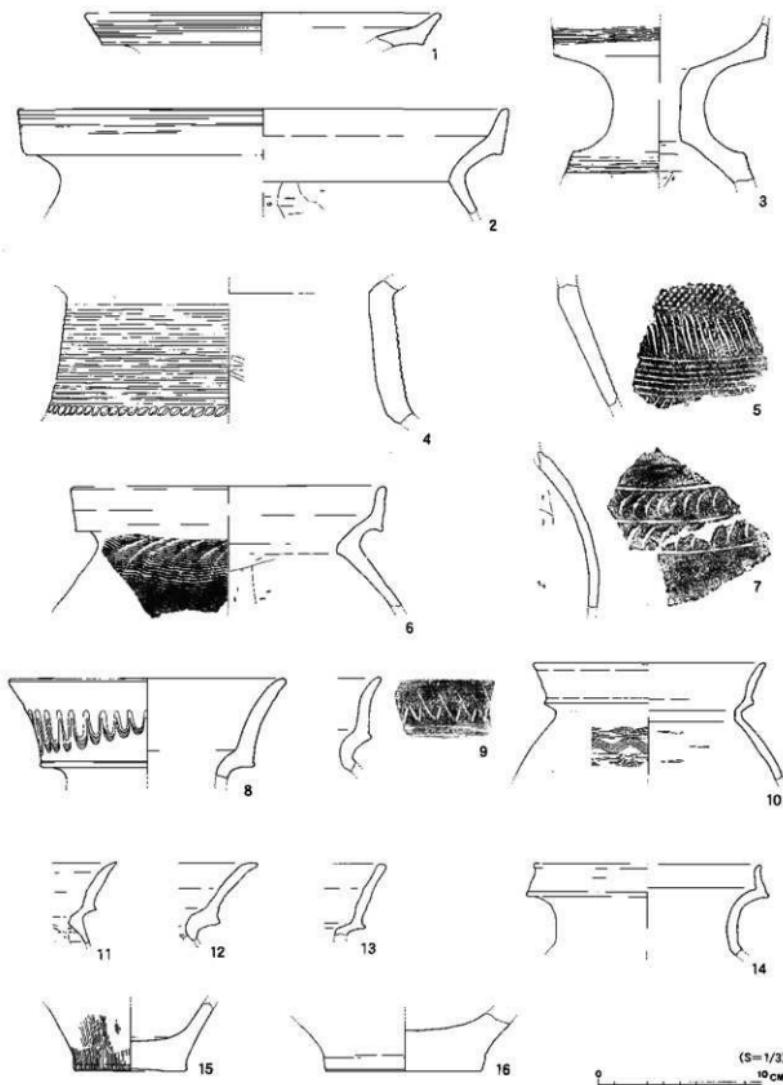
(第18図・1)は縄文土器片である。0.5mm~1mm大の砂粒を微量含み、外面が黒色・内面は暗灰褐色である。外面は横方向の条痕が残り、内面にはナデを施す。(2)は弥生上器甕の口縁部で、灰褐色を呈す。口縁部と体部の境に一条のヘラ描き沈線を施す。全面にハケ目が残り、口縁部外面は斜め・体部外面はタテ・口縁部内面は横・体部内面はやや粗く横から斜めに施す。(3)は淡赤褐色を呈し、砂粒を多く含む。外面は横方向のヘラミガキ、内面上半はハケ・下半は横方向のヘラミガキである。外面中位に幅0.8mm程の浅い横方向のヘラ描き沈線が2本残る。(4)は甕の口縁部で淡黄褐色を呈し、2mm大の砂粒を少量含む。口縁外面は横ナデで体部はタテハケを施す。外面に幅2mmのヘラ描き沈線を5本施し、最下の沈線より下をハケ原体を縦に強く押さえつけて段をつくる。内面は横方向のヘラミガキを施す。(5)・(6)・(7)は口縁が朝顔状に外方に大きく開く弥生土器甕の口縁部片である。いずれも櫛状工具によりごく浅く施文する。(5)は灰褐色を呈し、0.5mm大の褐色粒・黒色粒を多く含む。口縁端部はナデの後に波状文・口縁上面にはハケの後に波状文を施す。(6)は灰白色を呈し、0.5mm大の白色粒を多く含む。口縁端部は下方向に広がり、横ハケの後に斜格子目文(△)を施す。口縁上面にはハケの後に斜格子目文(×)を施す。(7)は灰褐色を呈し、0.5mm大の砂粒を微量含む。復元口徑16.4cmを測る。口縁端部には縦の刻目文、口縁上面には竹管文・ヘラによる山形文を施す。(8)は壺の頸部で、赤みを帯びた灰白色を呈し、0.5mm大の白色粒を多く含む。外面はタテハケを施し、2条の貼付突帯が付く。内面はナデを施す。(9)は灰白色を呈し、0.5~5mm大の砂粒を多く含む。外面には6条のつまみ出し突帯を造り、上2列と最下列に刻目をいれる。突帯の下には6本単位の櫛状工具による列点文を施す。内面は風化しているが、ナデと考えられる。(10)も壺の口縁部で、灰白色を呈し、1mm大の白色粒を微量含む。朝顔状に開いた口縁端部

に3本の凹線を施し、6本の縫の刻みを入れる。口縁下端にも刻印文がめぐる。頸部外面はタテのヘラミガキ・内面はナデとヨコハケを施す。(11)～(17)は体部の破片である。(11)は淡黄褐色を呈し、1～2mmの大白色砂粒を微量含む。外面は幅1mmの8本単位の櫛状工具により横線・波状線・横線を施している。波状線は右側に始点があり、最後に波状線を重ねて描き足している。(12)は淡黄褐色を呈し、1mmの大砂粒を多く含む。外面はタテハケの後9本以上の櫛描き文・刺突文を施す。内面は平滑でミガキと考えられる。(13)は淡赤褐色を呈し、1～2mmの大白色粒・褐色粒を多く含む。外面は横ナデの後に5本以上の櫛状工具による列点文を施す。内面は軽い横方向のヘラケズリを施す。(14)～(17)は凹線の間に刻目を入れる文様帯をもつもので、「塩町式」といわれるものである。(14)は暗褐色を呈し、外面に煤がつく。焼成がよく、硬質である。胎土は0.5mmの大白色粒・褐色粒を微量含む。外面は4本の凹線を施し、浅い刻印を入れる。内面は上位はヨコナデ、下位はハケを施す。(15)は灰白色を呈し、0.5mmの大白色粒を微量含む。蓋の肩部と考えられ、外面は3本の凹線を施し、深く刻印を入れる。内面はナデを施す。(16)は赤みを帯びた灰白色を呈し、1mmの大白色粒を少量含む。5本の凹線を施し、刻印を入れる。凹線の下には5本単位以上の列点文があり、内面はナデを施す。(17)は暗褐色を呈し、0.5mmの大砂粒を多く含む。5本の凹線を施し、上と下2列に刻印を入れる。内面は軽い横方向のヘラケズリを施す。(18)は高杯類の脚部と考えられる。淡黄褐色を呈し、0.5mmの大白色粒・褐色粒を多く含む。外面には8条の凹線を施し、最上段と最下段に浅く細かな刻印を入れる。内面は軽い横方向のヘラケズリを施す。(19)は淡赤褐色を呈し、1mmの大白色砂粒を多く含む。内外面共にナデで仕上げ、口縁外面に6本単位の波状文を施す。(20)は壺で淡黄褐色を呈す。胎土は1～3mmの大白色砂粒を多く含む。口縁は斜め下方にやや拡張され、外面に3条の凹線を施す。体部外面には9本単位の列点文を施す。体部内面は横方向のヘラケズリである。(21)は壺であろうか。淡灰褐色を呈し、1～5mmの大白色砂粒を多く含む。口縁外面に2条以上の凹線、頸部に5条以上の凹線を施す。体部内面は横方向のヘラケズリである。

(第19図・1)は暗褐色を呈し、1mmの大白色砂粒を微量含む。やや厚手の短い複合口縁で、外面に4本の凹線を施す。(2)は壺の口縁部で、復元口径30.1cmを測る。厚手で直立する複合口縁をつくり、外面上位に浅く3本の凹線が残り、ナデ消したと考えられる。体部内面は横方向のヘラケズリである。(3)は鼓形器台で淡黄褐色を呈す。全体的に厚手につくる。脚部内面のヘラ削りは浅いものである。胎土は2mmの大白色砂粒・赤褐色粒を多く含む。口縁部に幅広で4本以上・脚部は浅く5本以上の櫛描き文を施す。(4)は壺の頸部と考えられる。淡赤褐色を呈し、0.5mmの大白色砂粒を多く含む。外面には14条の凹線を施し、体部との境に指頭による点をめぐらせている。内面はヨコのヘラミガキで平滑に仕上げる。(5)は灰白色を呈し、0.5mmの大褐色粒を多く含む。外面は上から6本単位以上の列点文、ヘラによる斜行線、7本単位の櫛描き沈線、斜行線と装飾する。内面は平坦でナデと考えられる。(6)は壺の口縁で淡黄褐色を呈す。胎土は1～2mmの大砂粒を多く含む。復元口径19cmを測る。厚手で下方にやや拡張した複合口縁をつくる。体部外面は17本の



第18図 伊賀神社跡遺跡出土遺物実測図(1)



第19図 伊賀神社脇跡出土遺物実測図(2)

クシメの後に口縁による刺突文をめぐらせる。体部内面はヘラケズリである。(7)は淡黄褐色を呈し、1~2mm大の砂粒・褐色粒を多く含む。薄手なつくりで上方はややくびれ、頸部になると考えられる。外面は3本のヘラ描き沈線の間に口縁による刺突文をめぐらせる。内面は上方向のヘラケズリである。(8)は壺の口縁部である。淡赤褐色を呈し、1mm大の白色砂粒・赤褐色粒を多く含む。復元口径16.9cmを測る。口縁外面に波状文を描く。(9)は甌の口縁で淡赤褐色を呈す。胎土は0.5mm大の褐色粒を多量に含む。口縁外面に波状文を描く。(10)も甌で淡黄褐色を呈す。胎土は1mm大の褐色粒・金雲母を多量に含む。復元口径14cmを測る。薄手に造り、複合口縁の下端は横へ突き出す。体部外面は浅い櫛口文と波状文が残る。体部内面は横方向のヘラケズリである。(11)~(13)は口縁部片である。(11)は肌色で1mm角大の砂粒が混じる。複合口縁端部は薄く引き出し、口縁下端は外方に突出する。体部外面には浅い沈線が残り、内面は横方向のヘラケズリである。(12)は肌色で1mm角大の砂粒が混じる。複合口縁は外方向に広がり、端部はさらに外方向に折れる。口縁下端は外方に突出する。内面はヘラケズリである。(13)は淡灰肌色で1mm角大の微砂粒が混じる。複合口縁端部は上方にわずかに面をもつ。口縁下端は外方に強く突出する。(14)は甌の口縁から頸部である。淡黄褐色を呈し、1mm大の褐色粒を多く含む。複合口縁は内傾し、口縁端部はやや外反する。内外面共にナデで丁寧に仕上げられる。(15)・(16)は底部片である。(15)は暗灰褐色を呈し、1.5mm大の砂粒を少量含む。復元底径6.8cmを測る。厚い半底で外面はタテハケ、内面はナデで仕上げられる。(16)は淡黄褐色を呈し、1.5mm大の砂粒を多く含む。復元底径9.5cmを測る。厚い半底で内外面共にナデで仕上げられる。

その他、浜田市・江津市にまたがる人平山遺跡群(波子遺跡)で前期~後期の土器が出土している。ただし、B地点では後期後半~終末、A地点では「クロスナ」層から前期~後期初頭が少量と、地点ごとに差が見られる(註16)。上府遺跡では弥生中期の壺片(註17)、下府廐寺跡では寺院建立前の旧表土から後期の土器が出土している(註18)。

4 むすびにかえて

川向遺跡と密接な関係にあると考えられるのが、対岸の伊甘神社脇遺跡である。伊甘神社脇遺跡では弥生前期から後期の土器が見つかっており、さらに中世頃まで継続する。古代以降の柱穴・古墳時代の上墳が標高約3.3mの砂地で検出されており、川向遺跡と同様に下府川の氾濫を受けにくい場所にある。川向遺跡は弥生前期から中期にかけて遺物が希薄な状況で、周辺の耕作地のこととも考慮すると伊甘神社脇遺跡周辺に拠点的な集落が存在し、川向遺跡は周縁の集落とも想定できる。「川向」の地名も対岸の集落からみてつけられたと考えられる。

今回の調査は部分的であったが、木偶の出土など重要な調査結果を得た。まだ国府地区には丘陵部など多くの遺跡が存在すると考えられる。石見国府がおかれる基盤となった以前の様相をさらに明らかにしていく必要がある。

- (1) 追跡周辺の地形発達状況は中村唯史氏に多くのご教示をいただいた。
- (2) 松本岩雄 1992 「石見地域」
『弥生土器の様式と編年・山陽・山陰編一』木耳社
他の主要な土器編年と照合すると、畿内系七器との共伴関係が分かり山陰地域で多く用いられる草加編年の3~6期、右見山間部の資料による吉川編年IV~VI期にあたると考えられる。中でも多いのが草田~6期、吉川V~VI期である。
- 鹿島町教育委員会 1992
『講習地区浜宮塙整備事業発掘調査報告書 5 南浦武草田遺跡』
- 吉川 正 1996 「邑智郡における弥生時代~古墳時代初頭の十層について」
第7回石見考古学研究会発表資料
- 鳥取県立八代立つ風土記の丘 1998
『八雲立つ風土記の丘』No.147.148.149合併号
- (3) 木偶は菅原では以下の出土例がある。
- 大阪府山賀遺跡(1点・前期)、大阪府加美遺跡(1点・中期)、大阪府鬼吹川遺跡(1点・中期)、滋賀県大中の湖南遺跡(3点・中期・男女)、滋賀県湖ノ部遺跡(4点・中期・男女各2点)、滋賀県烏丸崎遺跡(1点・中期)、滋賀県下之郷遺跡(1点・中期)、石川県八日市地方遺跡(1点・中期)、徳島県杵遺跡(1点・後期)、愛知県朝日遺跡(1点・後期)
- 大阪府立弥生文化博物館 1992
『平成4年春季特別展 弥生の神々・祭りの源流をさぐる・』
- 森井貞雄 1998 「移ろう神と依り代・弥生の神・」
『平成10年春季特別展 繩紋の祈り・弥生の心・森の神から稻作の神へ・』
- 大阪府立弥生文化博物館
- 濱 誠 1993 「弥生時代の木偶と祭祀 - 中主町湯ノ部遺跡出土木偶から -」
『紀要』六 (財)滋賀県文化財保護協会
- 滋賀県立安土城考古博物館 1994
『弥生の祈り人 - よみがえる農耕祭祀 -』
- (4) 前掲註3 森井 1998
- (5) 奈良国立文化財研究所 1993
『木器集成図録 近畿原始篇』
- (6) 山雲における当波別の編年にあてはめると、妻は肩部に粗いタチハケを施し、松山III~IV期に該当すると考えられる。高弧は半球形を呈すもの(松山高弧B類)が未確認だが、坯部と脚部の境に粗いタチハケを施し、企美的に丸みをもつ深いつくりである。松山高弧B類でも後出的な可能性を考えている。
- 松山脅弘 1991
「出雲における古墳時代前半期の土器の様相 大東式の再検討」
『島根考古学会誌』第8号 島根考古学会
- (7) 島根県教育委員会 1979 「石見国府跡推定地調査報告Ⅱ」
浜田市教育委員会 1998
『横路遺跡(原井ヶ市地X)』
(8) 摩町教育委員会 1998
『清石周辺外発掘調査報告書』
- 大谷晃二 1994
『山陰地域の須恵器の編年と地域色』
『島根考古学会誌』第11号 島根考古学会
- (9) 島根県教育委員会 1985 「印脚遺跡」
- (10) 島根県教育委員会 1992 「大森遺跡」
『石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 島根県教育委員会 1995 「久木奥窓跡」
『一般国道9号江津道路建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書1』
- (11) 鹤原博英 1998
『中世前期の貿易陶磁器・右見の様相』
『第26回山陰考古学研究集会資料集』
- 山陰における中世前期の貿易陶磁器』
- (12) 貿易陶磁の分類と時期については以下の文献を主に参照した。
- 森田賛・横田賛次郎 1978
『太宰府山上の輸入陶磁器について』
『山陰史料資料館研究論集4』
- 山本信夫 1995 「中世前期の貿易陶磁」
『中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』』
- 山本信夫 1998
『中世前期の貿易陶磁器』
…その分析視点と近年の研究動向…』
『第26回山陰考古学研究集会資料集』
- 山陰における中世前期の貿易陶磁器』
- (13) 遺跡から南へ約500m、古刹である多陀寺へ至る谷の東側に
「石州の下多陀岩屋地蔵」至徳二年丁卯七月口 稲土 「L」の銘をもつ地蔵尊がある。近世頃に造り変えられたと考えられるが至徳四年(嘉慶1年・1807年)の銘があり、この一带が「石州府下中」と認識されていたことがうかがえる。
- 鎌川廣吉 1998 「府中岩屋地蔵尊」
『亀山』第25号 浜田市文化財愛護会
- また、川向遺跡からさらに約200m下流の地点の試掘調査を実施した結果、山際に中世前期の埴輪跡が確認された。集落とは考えにくく、作業小屋のようなものが想定される。川向遺跡に併んだ人々の生活範囲であったと考えられる。
- 浜田市教育委員会 1995
『伊豆上地区西整理事業に伴う 古市跡調査報告書』
- (15) 島根県教育委員会 1979 「石見国府跡推定地調査報告Ⅱ」
- (16) 江津市教育委員会・浜田市教育委員会 1988
『大平山遺跡群調査報告書』
浜田市教育委員会・江津市教育委員会 1990
『大平山遺跡群発掘調査報告書』
江津市教育委員会 1990
『波之池跡発掘調査報告書』
- (17) 島根県教育委員会 1980
『石見国府跡推定地調査報告Ⅲ』
- (18) 浜田市教育委員会 1993 「下府庵跡」

V. 自然理科学分析

川向遺跡出土木偶の放射性炭素年代測定

株式会社 地球科学研究所

試料データ	C14年代(y BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (permil)	補正C14年代(y BP)	
Bata—	134823	1650 ± 40	-27.0	1620 ± 40

試料名 (12227) KAWAMUKO(木偶・第15図-1、巻頭図版3・4)

測定方法、期間 Standard—AMS (加速器質量分析)

試料種、前処理など wood、acid—alkali—acid (酸—アルカリ—酸洗浄)

14C age (y BP) : 14C年代測定値
試料の14C/12C比から、單純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した年代。
半減期として5568年を用いた。

補正14C age (y BP) : 補正14C年代値
試料の炭素安定同位対比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定して資料の炭素の同位体分別を知り
 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で、算出した年代。

$\delta^{13}\text{C}$ (permil) : 試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 。
この安定同位体比は、下式のように標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(%)
$$\delta^{13}\text{C}(\%) = \left(\frac{^{13}\text{C}}{^{12}\text{C}} \right)_{\text{試料}} - \left(\frac{^{13}\text{C}}{^{12}\text{C}} \right)_{\text{標準}} \times 1000$$

$$= \left(\frac{^{13}\text{C}}{^{12}\text{C}} \right)_{\text{標準}}$$

ここで、 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ [標準] = 0.0112372である。

曆年代 : 過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動に対する補正により、曆年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の測定、サンゴのU-Ti年代と ^{14}C 年代の比較により、補正曲線を作成し、曆年代を算出する。最新のデータベース("INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al. 1998. Radiocarbon 40(3))により約19000年までの換算が可能となった。

* 但し、10000y BP以前のデータはまだ不完全であり今後も改訂される可能性が高いので、補正前のデータの保管を推奨します。

分析機関 : BET ANALYTIC INC
4985SW74Court.FL33155,U.S.A

川向遺跡発掘調査における自然科学分析

川崎地質株式会社

はじめに

川向遺跡は島根県西部浜田市下府町川向に位置する。本報告は、遺跡周辺の古環境変遷を推定する目的で、浜田市教育委員会が川崎地質株式会社に委託して実施した自然科学分析の概報である。

1. 試料について

分析用試料は、図1に示す地点で浜田市教育委員会により採取・保管されていたものである。柱状図および試料採取層準を、図3の花粉ダイアグラム中に示す。柱状図右側の数字が試料番号で、採取深度に示した。また、柱状図左側に発掘地点の層序および推定堆積年代を示した。

2. 分析方法および結果

花粉分析処理、珪藻分析処理は、渡辺（1995a,b）に従い行った。樹種同定用の永久プレパラートは、図2に示す手順で作成した。

花粉・珪藻分析では400倍、あるいは必要に応じ600倍、1000倍を用いて顕微鏡観察を行った。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草木化石も同定した。また、珪藻分析では、原則的に珪藻化石総数が200個体以上になるまで同定を行った。しかし、一部の試料では花粉化石および珪藻化石の含有量が少なかったために、木本花粉化石総数あるいは、珪藻化石総数で200を越えることができなかった。

樹種同定では、40～600倍の倍率で顕微鏡観察を行った。樹種の同定に当たっては、現生標本および資料（島根大学総合理工学部古野研究室蔵）との顕微鏡下での比較を基本とした。また、島根大学古野 育教授には終始ご指導いただいた。

花粉分析結果を図3の花粉ダイアグラムに、珪藻分析結果を図4の珪藻ダイアグラムおよび図5の珪藻総合ダイアグラムに示す。

花粉ダイアグラムでは、同定した木本花粉総数を基数にした百分率を各々の木本花粉、草本花粉について算出し、スペクトルで表した。また右端に各分類毎の相対率を示すグラフを付けた。珪藻ダイアグラムでは、同定総数を基数にした百分率を各々の種類について算出し、スペクトルで表した。珪藻総合ダイアグラムのうち左端の「生息域別グラフ」は、同定した全ての種類を対象に、それぞれの要因（生息域）毎に百分率で表したものである。その他の4つのグラフは、淡水種の珪藻についてそれぞれの要因毎に百分率で表したものである。

3. 樹種の同定と記載

各分類群毎に記載を行い、表1に同定結果を示した。

(1) マツ属（複維管束亜属） *Pinus* (sub. *Diploxylon*)sp.

試料名 (No.) : 8

記載：構成細胞は仮道管、放射仮道管、放射柔細胞、垂直樹脂道および水平樹脂道を取り扱むエピセリウム細胞からなる。早材から晩材への移行はやや急で、晩材の幅は広い。放射仮道管には鋸歯状肥厚が認められる。放射組織は単列であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を示す。エピセリウム細胞は薄壁である。垂直樹脂道は早、晩材部とともに分布し、チロソイドが見られる。分野壁孔は窓状であることなどから、マツ属（複維管束亜属）と同定した。

(2) スギ *Cryptomeria japonica* D.Don

試料名 (No.) : 杭?、板目材3孔、21(板材)、45(杭)、46、47

記載：構成細胞は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材の幅はほとんどの試料が広い。樹脂細胞は主に晩材部に分布している。分野壁孔は大型のスギ型で1~3個存在することなどから、スギと同定した。

(3) イヌガヤ属 *Cephalotaxus* sp.

試料名 (No.) : 杭

記載：構成細胞は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材の幅は非常に狭い。樹脂細胞は多く、年輪内に均等に散在している。分野壁孔は非常に不明瞭であるが、トウヒ型で1~2個存在する。仮道管にらせん肥厚が顕著に認められることなどから、イヌガヤ属と同定した。

(4) コナラ属（アカガシ亜属） *Quercus* (sub. *Cyclobalanopsis*)sp.

試料名 (No.) : 曲柄又鍬

記載：中庸で円形ないし梢円形の道管が単独で放射方向に配列する放射孔材である。道管せん孔は単せん孔である。また、道管にはチロースが非常によく発達し、周囲仮道管が存在する。軸方向柔細胞は接線方向に1ないし2細胞幅の独立帶状柔組織を形成している。放射組織は同性で、低い単列放射組織ときわめて幅の広い広放射組織がある。さらに道管放射組織壁孔は典型的な柵状を示す。以上の組織上の特徴から、コナラ属（アカガシ亜属）と同定した。

(5) ヌルデ *Rhus javanica* L. var. *roxburghii* (DC.) Rehder et wils

試料名 (No.) : 木偶

記載：円形ないし梢円形の大きい道管が単独ないし2~数個複合して多列に配列する散孔材である。孔隙外では散在状で、年輪界に近づくにつれて短い接線状~斜線状に配列する傾向がある。道管せん孔は単せん孔である。また、道管中にはチロースが非常によく発達している。軸方向柔組織は周囲状である。放射組織は異性で、1~3(ときに4)細胞幅であり、両端に

は直立細胞および方形細胞が出現する。また、放射柔細胞中に結晶が僅かに認められる。以上の組織上の特徴からヌルデと同定した。

4. 花粉分帯

花粉組成の特徴から以下のように地域花粉帯を設定した。以下に各花粉帯の特徴を示す。また、本文中では花粉組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載し、試料No.も下位から上位に向かって記した。

(1) II帯(試料No.1)

スギ属が卓越し、アカガシ亜属を伴う。その他、特徴的に出現する種類はない。

(2) I帯(試料No.2～4)

スギ属が卓越するほか、マツ属(複維管束亜属)、アカガシ亜属を伴う。

5. 硅藻分帯

珪藻組成の特徴から以下のように地域珪藻帯を設定した。以下に各花粉帯の特徴を示す。また、本文中では珪藻組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載し、試料No.も下位から上位に向かって記した。

(1) D-II帯(試料No.1、2)

試料No.2で *Navicula radiososa* が卓越するものの、*Cymbella* 属、*Diploneis* 属、*Navicula* 属、*Pinnularia* 属が特徴的に出現する。

(2) D-I帯(試料No.3)

海あるいは汽水種がやや高率を示す。淡水種の出現傾向は下位のD-II帯と大差ない。

(3) D-No.1帯(試料No.4)

Pinnularia spp. が卓越するが、他の種類の出現傾向下位のD-II、III帯と大差ない。

6. 既知の資料との比較

浜田市内では、川向遺跡上流部の横路遺跡内2地区において花粉分析が実施、報告されている(川崎地質株式会社、1997, 1998)。これらの内、原井ヶ市地区では古代以降の堆積物を対象に分析が行われ、断続的にではあるが花粉組成変遷が明らかにされていた。今回の分析では、弥生時代後期～古墳時代、中世以降という時代の堆積物を対象に花粉分析が行われ、既知の資料に先立つ時期の花粉組成が明らかになったことになる。

原井ヶ市地区では、IV帯(古代～中世)でスギ属花粉が卓越していた。一方今回得られた花粉組成でもスギ属花粉が卓越し、弥生時代後期にはすでに下府川流域にスギ林が分布していたことが明らかになった。

7. 古環境変遷

ここでは、花粉分析結果および珪藻分析結果より遺跡周辺の古環境を推定する。

(1) P-II帯期（弥生時代後期～古墳時代）

珪藻化石で汽水種が若干出現する。地理的な位置、標高から考えて調査地点は海水の影響を受けうる場所である。これらのことから、調査地点は国府湾の湾奥に位置し、塩水楔などの海水の逆流現象の影響を受けるような位置であったと考えられる。また、淡水・底生種が卓越すること、現地での地層観察で腐植のラミナが顕著であったことなどから、汀線に近い場所であったと考えられる。一方でラミナが観察されたこと、草木花粉の検出量が少ないと併せ調査地点周辺は開放水域に近い状況であったと考えられる。ただし、離れたところにはヨシやカヤツリグサ類の茂る湿地が存在したと考えられる。

花粉化石でスギ属が卓越することから、下府川流域の低地にスギ林が分布していたことが示唆される。下府川流域にスギ林が存在したことは前述のように、川崎地質株式会社（1998）でも推定されていた。今回の分析結果はこのことを追証するとともに、その起源を弥生時代後期まで下げたことになる。

またアカガシ並属花粉の出現率も高く、カシ類を要素とする照葉樹林が周囲の丘陵や山々に分布していたと考えられる。

(2) P-I帯期（弥生時代後期～中世頃？）

珪藻化石で一時に海水種が増加し、海水準の上昇が考えられる。一方で、砂州の消長など地理的な変化による可能性も指摘できる。この原因については、今後周辺の地質調査を踏まえ考察する必要がある。

花粉組織では、遺跡周辺の植生を示す可能性の高い草木花粉がやや高率になる。特にイネ科（40ミクロン以上）が、前時期に比べ特徴的に検出される。上流の横路遺跡原井ヶ市地区では古代以降に水田耕作が行われていたことが明らかであり、横路遺跡あるいは、調査地点近辺での水田耕作に起因すると考えられる。一方で、調査地近辺でヨシ原などの湿地が存在した可能性もある。

木本花粉では引き続きスギ属花粉が卓越し、下府川流域に引き続きスギ林が分布したことが解る。また、樹種鑑定を行った試料は弥生時代後期～古墳時代の層準から得られた物で、自然木および杭など10個体の内6個体がスギであった。このことは、花粉化石から推定されるスギ林の存在を裏付けることになる。

一方でアカガシ並属花粉に加え、マツ属（複維管束並属）花粉もやや高い出現率を示すようになる。このことは、人間の活動に伴いアカマツ林が広がり、スギ林や照葉樹林が縮小したことが原因であると考えられる。

8. まとめ

川向遺跡における花粉分析、珪藻分析、樹種同定の結果、以下のことが明らかになった。

- (1) 花粉分析により、本地域の花粉帯をP-I、II帯に分帶した。
- (2) 珪藻分析結果から、本地域の珪藻帯をD-I～IIIの3珪藻帯に分帶した。
- (3) 花粉分析結果、珪藻分析結果を基に、調査地周辺での古環境変遷を推定した。特筆すべき点は以下の事柄である。
 - ① 僅かに海水の影響を受ける場所であり、D-II帯では一時的に海水の影響が強くなつた。
 - ② 下府川流域で、スギ林が存在したことが追証できた。また、スギ林は弥生時代後期頃にすでに存在したことが明らかになった。

9. 引用文献

川崎地質株式会社(1997) 横路遺跡(土器上地区)発掘調査における花粉分析、横路遺跡(土器上地区)一下府川河川局部改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-, 54-58., 島根県浜田市木建築事務所・浜田市教育委員会, 島根。

川崎地質株式会社(1998) 横路遺跡(原井ヶ市地区)発掘調査における花粉分析、横路遺跡(原井ヶ市地区)-浜田東中学校建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-, 65-71., 浜田市教育委員会, 島根。

渡辺正巳(1995a) 花粉分析法、考古学ライブリー-65, 考古資料分析法, 84-85., ニュー・サイエンス社, 東京。

渡辺正巳(1995b) 珪藻分析法、考古学ライブリー-65, 考古資料分析法, 86-87., ニュー・サイエンス社, 東京。

試料名	整理番号	樹種名	備考
机?	W99102901	スギ	15図-2
杭	W99102902	イヌガヤ属	16図-4
木偶	W99102903	ヌルデ	15図-1
曲柄又鐵	W99102904	コナラ属(アカガシ亞属)	16図-1
板口材3孔	W99102905	スギ	16図-6
8(杭?)	W99102906	マツ属(複葉管束亞属)	16図-2
21(板材)	W99102907	スギ	16図-5
45(杭)	W99102908	スギ	16図-3
46	W99102910	スギ	自然木
47	W99102909	スギ	自然木

表1 樹種同定結果一覧表

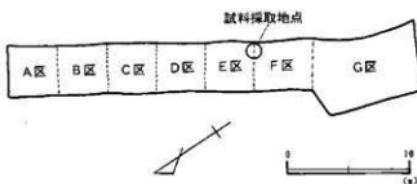


図1 試料採取地点

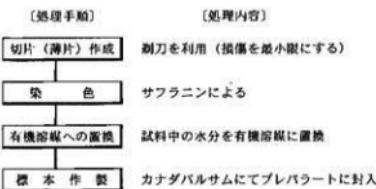


図2 樹種同定用永久プレパラート作成フローチャート

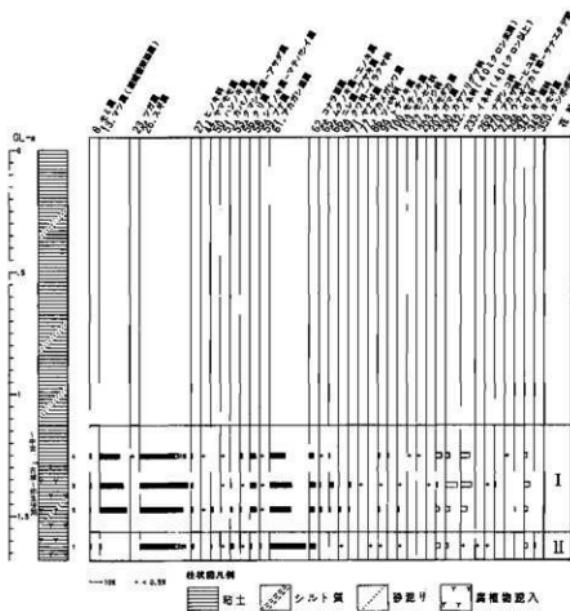


図3 花粉ダイヤグラム

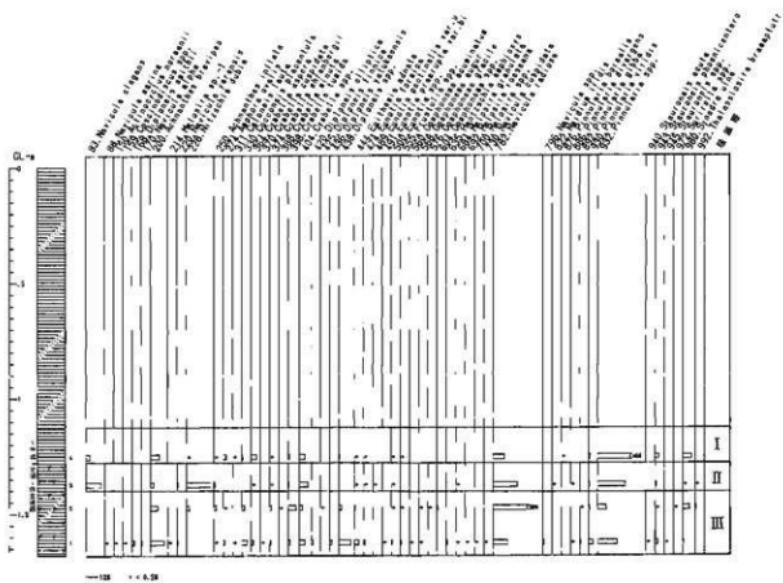


図4 珊藻ダイアグラム

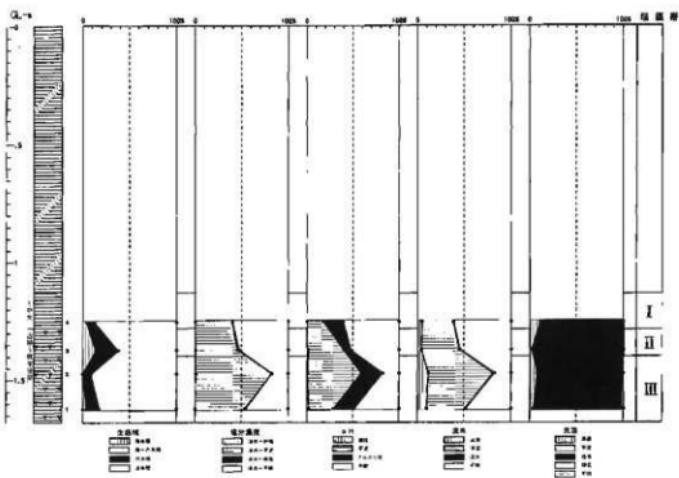


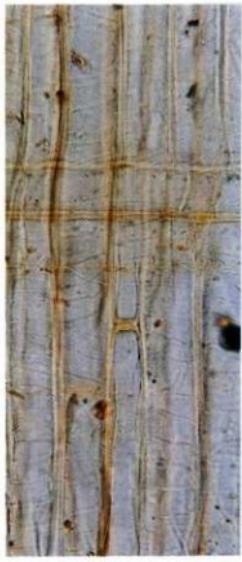
図5 珊藻総合ダイアグラム



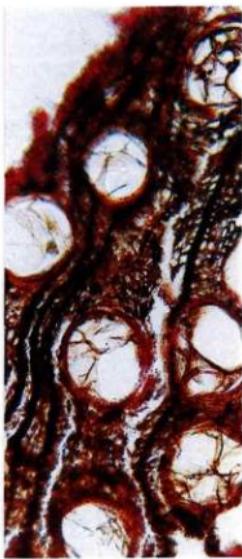
杭:イヌガヤ属 横断面×100



接線断面×100



放射断面×380



曲柄又鉢:アカガシ亜属 横断面×100



接線断面×100



放射断面×380



8(杭):マツ属(複雑管束木属)横断面×40



接線断面×100



放射断面×560



21(板材):スギ 横断面×100



接線断面×100



放射断面×560



木偶:ヌルデ 横断面×40



接線断面×100



放射断面×190

図 版



図版1 調査前（北より）



図版2 調査後（北東より）



図版3 遺物出土状況（南西より）



図版4 F・G調査区全景（北東より）



図版5
試掘調査T1調査区
(北より)



図版6
試掘調査T2調査区
(東より)



図版7
試掘調査T4調査区
(北より)



図版 8
A 調査区南北土層



図版 9
F 調査区東西土層



図版10
F・G 調査区中央
遺物出土状況
(東より)



図版11
F・G調査区中央
遺物出土状況
(西より)



図版12
G調査区東側
遺物出土状況



図版13
G調査区中央
遺物出土状況



図版14
G調査区西側
遺物出土状況



図版15
F調査区北側
遺物出土状況



図版16
F調査区北側
曲柄又鋸出土状況
(南より)



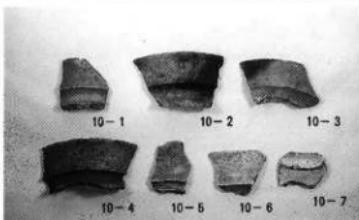
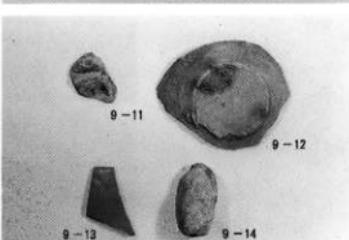
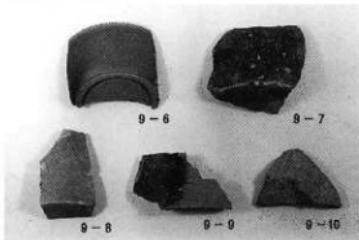
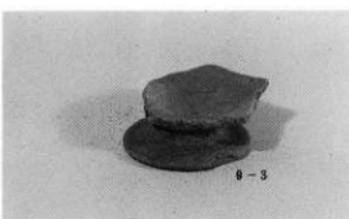
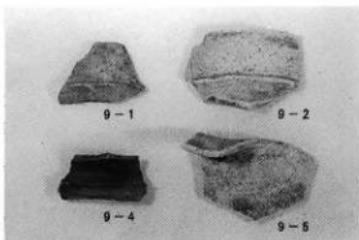
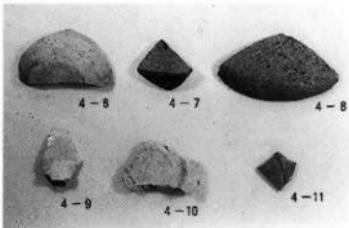
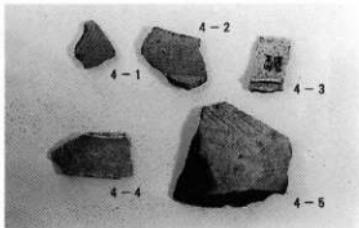
図版17
F調査区北側
木偶出土状況
(北より)



図版18
砂層面検出状況



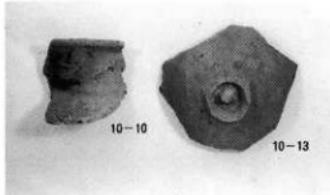
図版19
埋戻作業状況



図版20 出土遺物(1)



10-9



10-10

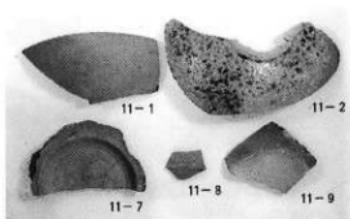
10-13



10-11



10-12



11-1

11-2

11-7

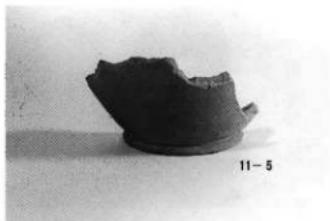
11-8

11-9

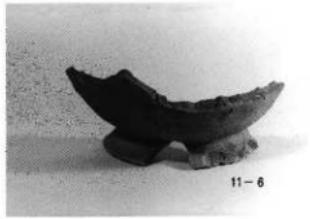
11-3



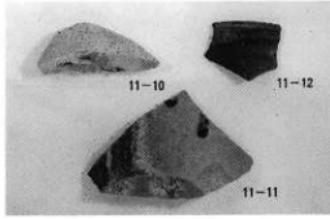
11-4



11-5



11-6

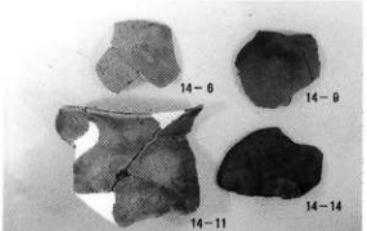
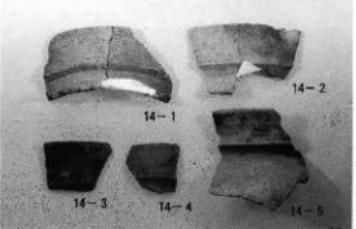
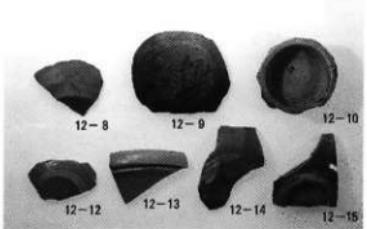
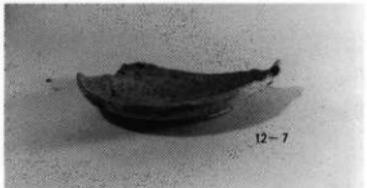
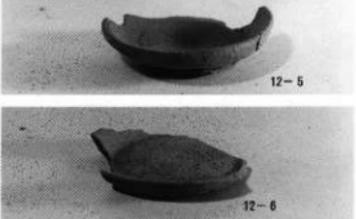
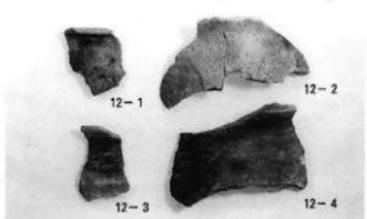
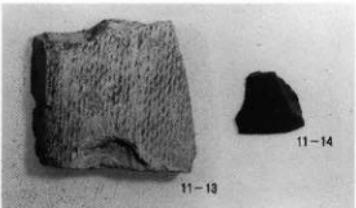
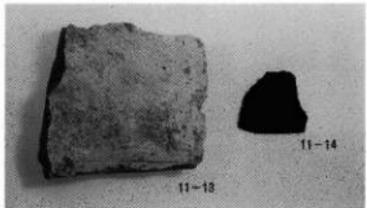


11-10

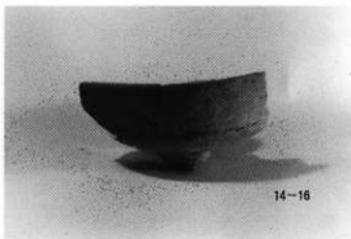
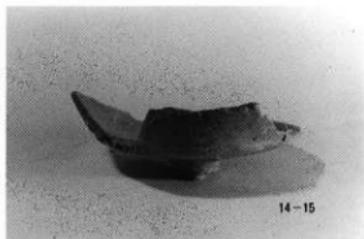
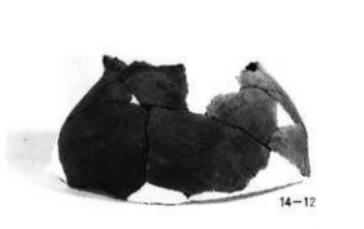
11-12

11-11

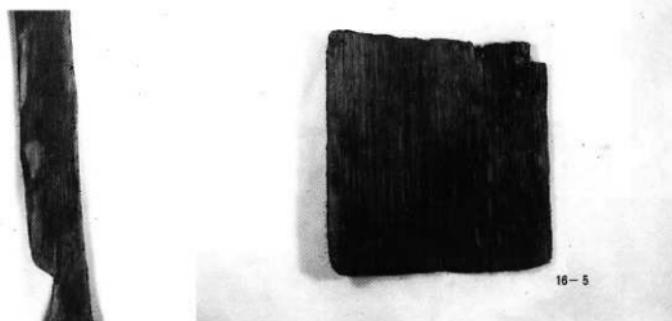
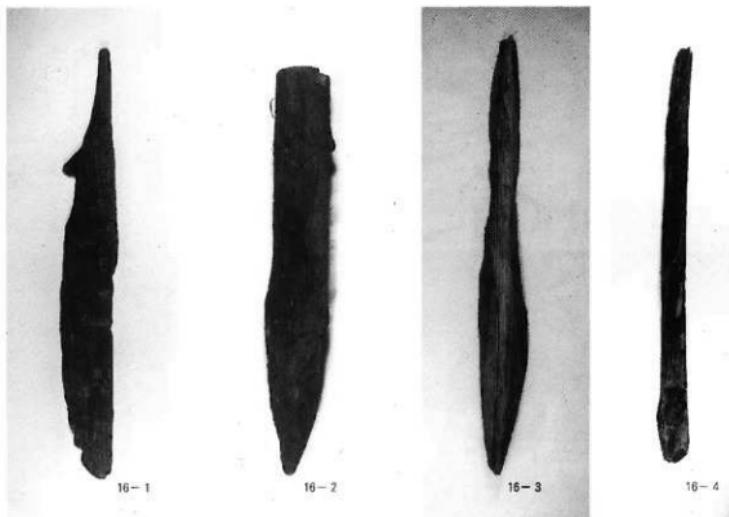
図版21 出土遺物(2)



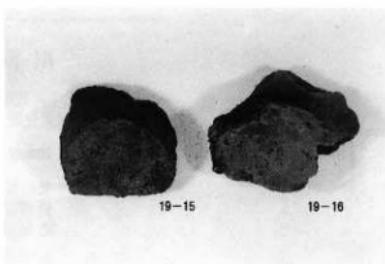
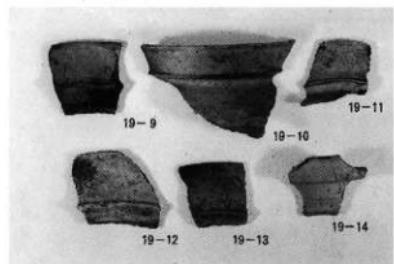
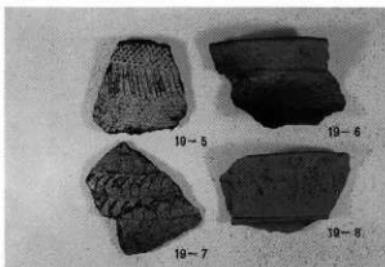
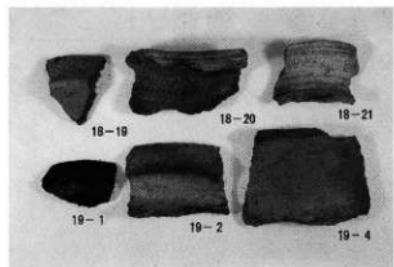
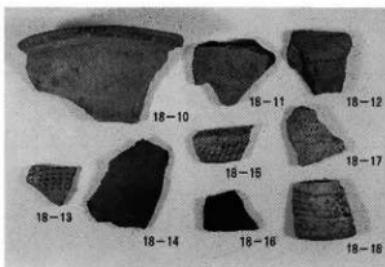
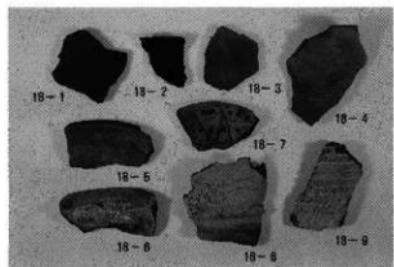
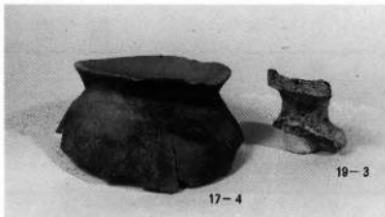
図版22 出土遺物(3)



图版23 出土遗物(4)



圖版24 出土遺物(5)



図版25 伊甘神社脇遺跡他出土遺物

報告書抄録

ふりがな 書名	かわむこういせき 川向遺跡							
副書名	多陀寺川荒廃砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	榎原 博英							
編集機関	島根県浜田市教育委員会							
所在地	〒697-8501 島根県浜田市殿町1番地 TEL 0855-22-2612(代)							
発行年月日	2000年2月							
ふりがな 所在遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ○○° ○○'	東経 ○○° ○○'	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かわむこういせき 川向遺跡	島根県 浜田市 下府町	32202	L15	34° 55' 38"	132° 07' 03"	19990621 ～ 20000229	264 m ²	多陀寺川荒 廃砂防事業 に伴う発掘 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
川向遺跡	包含層	弥生～鎌倉		弥生土器 古式土師器 須恵器 中世土師器 貿易陶磁器 木製品 曲柄火鉢 木偶				

川向遺跡

多陀寺川荒廃砂防事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2000年2月 発行

発行 島根県浜田上木建築事務所
島根県浜田市教育委員会
島根県浜田市殿町1番地
印刷 柏村印刷印刷株式会社